

讀方だつて、何だ、大概、大學朱熹章句で行くんだから、尊い御經を勿體ないが、此の山には薬の草が多いから、氣の所爲か知らん。麓から慙うやつて一里ばかりも来たかと思ふと、風も清すが、清しい薬の香がして、何となく身に染むから、心願があつて近頃から讀み覺えたのを、誦へながら歩行いて居るんだ。」

慙く打明けるのが、此際自他の爲と思つたから、高坂は親しく先づ語つて、扱、

「姉さん、お前さんは麓の村にでも住んでる人なんか。」

「はい、二俣村でございます。」

「あ、あの、越中の蠣波へ通ふ街道で、此處に来る道の岐れる、目まぐるしいほど馬の通る、彼處だね。」

「然やうでございます。最う路が悪うございまして、車が通りませんものですから、炭でも薪でも、残らず馬に附けて出しますのでございます。」

それに丁ど此の御山の石の門のやうに成つて居ります、戸室口から石を切出しますのを、皆馬で運びますから、一人で五疋も曳きますのでございますよ。」

「それでは其の麓から来たんだね、唯一人……」  
靜に歩を移して居た高坂は、更に又女の顔を見た。

「はい、一人でございませす、而して此方へ参りますまで、お姿を見ましたのは、貴方ばかりでございますよ。」

いかにもといふ面色して、

「私も矢張、然うさ、半里ばかりも後だつた、途中で年寄つた樵夫に逢つて、路を聞いた外にはお前さん限。」

奈何して往つて還るまで、人ツ子一人居ようとは思はなかつた。」

此の邊唯なだらかな蒼海原、沖へ出たやうな一面の草を啣しながら、

「や、ものを言つても一つ／＼箆に響くぞ、寂しい處へ、能くお前さん一人で来たね。」

女は乳の上へ右左、幅廣く引掛けた桃色の紐に兩手を挟んで、花籃を揺直し、

「貴方、其の樵夫の衆にお尋ねなすつて可うございました。そんなに嶮しい坂ではございませんが、些とも人が通ひませんから、誠に知れ難いのでございます。」

「此の奥の知れない山の中へ入るのに、目標が那の石ばかりぢや分らんではないかね。」

それも、南北、何方か醫王山道とでも鑿りつけてあれば未しもだけれど、唯河原に轉つてゐる、ごろた石の大きいやうな、其の背後から草の下に細い道があるんだもの、一寸間違へようものなら、半年経歴つても頂には行かれないと、樵夫も言つたんだが、全體何だつて、そんなに祕して

置く山だらう。全く那の石の裏より外に、何處も路はないのだらうか。」

「ございませんとも、此の路筋さへ御存じで在らつしやれば、世を離れました寂しさばかりで、獸も可恐のは居りませんが、一足でも間違へて御覽なさいまし、何千丈とも知れぬ谷で、行留りになりますやら、斷崖に突當りますやら、流に岩が飛びましたり、大木の倒れたので行く前が塞つたり、其間には草樹の多いほど、毒蟲もむら／＼して、甚麼に難儀でございませう。

舊へ歸るか、俱利伽羅峠へ出抜けますれば、無事に何方か國へ歸られます。其でなくつて、無理に先へ參りますと、終局には草一條も生えせん焼山に成つて、餓死をするさうでございませう。本當に貴方がおつしやいます通り、樵夫がお教へ申しました石は、飛驒までも末廣がりの、醫王の要石と申しまして、一度踏外しますと、それこそ路がばら／＼になつて了ひますよ。」

「然し一體、醫王といふほど、此處で藥草が採れるのに、何故世間とは隔つて、行通がないのだらう。」

「それは、あの承りますと、昔から御領主の御禁山で、滅多に人をお入れなさらなかつた所爲なんでございませう。御領主ばかりでもござんせん。結構な御藥の採れます場所は、又御守護の神々佛様も、出入をお止め遊ばすのでございませうと存じます。」

譬へば仙境に異靈あつて、恣に人の藥草を採る事を許さずといふが如く聞えたので、是が少からず心に懸つた。

「それでは何か、私なんぞが入つて行つて、欲しい草を取つて歸つては悪いのか。」

と高坂は稍氣色ばんだが、悚然と肌寒くなつて、思はず口の裡で、

二

慧雲含潤 電光晃耀 雷聲遠震 令衆悅豫  
日光掩蔽 地上清涼 鬚鬚垂布 如可承攬

「否、山さへお暴しなさいませねば、誰方がおいでなさいましても、大事なさいさうでございませう。藥の草もあります上は、毒な草も無いことはございませぬ。無暗な者が採りますと、どんな間違にならうも知れませんが、昔から禁札が打つてあるのでございませう。貴方は、然うして御經をお読み遊ばすくらの、縦令お山で日が暮れても些ともお氣遣な事はございませぬと存じます。」

取草藥  
「あ、然やうなら、貴方はお藥になる草を採りにおいでなさるのでござんすかい。」

「少々無理な願ですがね、身内に病人があつて、迎も醫者の薬では治らんに極つたですから、此の醫王山でなくつて外に無い、私がか心當の薬草を採りに来たんだが、何、姉さんは見懸けた處、花でも摘みに上るんですか。」

「御覽の通、花を賣りますものでござんす。二日置き、三日置に參つて、お山の花を頂いては、里へ持つて出て商ひます、丁ど唯今が種々な花盛。

千蛇が池と申しまして、頂に海のやうな大な池がございます。而して此の山路は何處にも清水なぞ流れては居りません。其代暑い時、咽喉が渴きますと、蒼い小な花の咲きます、日蔭の草を取つて、葉の汁を噛みますと、それは最う、冷い水を一斗ばかりも飲みましたやうに寒うなります。其が無いと凌げませんほど、水の少い處ですから、菖蒲、杜若、河骨はござんせんが、躑躅も山吹も、あの、牡丹も芍薬も、菊の花も、桔梗も、女郎花でも、皆一所に開いて居ますよ、此の六月から八月の末時分まで。其の牡丹だの、芍薬だの、結構な花が取れますから、たんとお鳥目が頂けます。まあ、どんなに綺麗でございませう。

而して貴方、お望の草をお採り遊ばすお心當は何の邊でござんすえ。」

と笠ながら差覗くやうにして親しく聞く、時に清い目がちらりと見えた。

高坂は何となく、物語の中なる人を、幽境の仙家に導く牧童などに逢ふ思ひがしたので、言も

自から慇懃に、

「私も其處へ行くつもりです。四季の花の一時に咲く、何といふ處でせうな。」

「はい、美女ヶ原と申します。」

「びぢよがはら？」

「あの、美しい女と書きますつて。」

女は俯向いて羞ぢたる色あり、物の淑しげに微笑む様子。

可懐さに振返ると、

「あれ。」と袖を斜に、袂を取つて打傾き、

「あれ、まあ、御覽なさいまし。」

其の草染の左の袖に、はら／＼と五片三片紅を點じたのは、山鳥の抜羽か、非ず、蝶か、非ず、蜘蛛か、非ず、櫻の花の零れたのである。

「奈何でございませう、此の二三ヶ月の間は、何處からともなく、恚うして、ちら／＼ちら／＼絶えず散つて參ります。それでも何處に櫻があるか分りません。美女ヶ原へ行きますと、十里南の能登の岬、七里北に越中立山、背後に加賀が見晴せまして、もう此節は、霞も霧もかゝりませんに、見紛ふやうな其らしい花の梢もござんせぬが、大方此の花片は、煩い町方から逃げて來

て、遊んで居るのでございませう。それとも那裏這裏山の中を何かの御使に歩いて居るのかも知れませぬ。」

と女が高く仰ぐに連れ、高坂も葎の中に伸上つた。草の緑が深くなつて、倒に雲に映るか、水底のやうな天の色、神靈祕密の氣を籠めて、薄紫と見るばかり。

「其の美女ヶ原まで何のくらあるね、日の暮れない中行かれるでせうか。」

「否、憊う櫻が散つて参りますから、直でございます。私も其處まで、お供いたしますが、今日こそ貴方のやうなお連がございますけれど、平時は一人で参りますから、日一杯に里まで歸るのでございます。」

「日一杯？」と思ひも寄らぬ状。

「甚麼に又遠い處のやうに、樵夫がお教へ申したのでござんすえ。」

「何、樵夫に聞くまでもないです。私に心覺が丁とある。先づ凡そ山の中を二日も三日も歩行かなければやならないですな。」

尤も上りは大抵何のくらると、そりや豫て聞いては居るんですが、日一杯だの最う直だの、什麼に輒く行かれる處とは思はない。

御覽なさい、憊うやつて、五體の満足なは謂ふまでもない、谷へも落ちなけりや、巖にも躓か

ず、衣物に綻が切れようぢやなし、生爪一つ剥しやしなない。

支度は爲て來たつても餒い思ひもせず、其の蒼い花の咲く草を捜さなけりやならんほど渴く思ひを爲るでもなし、勿論此の先甚麼難儀に逢はうも知れんが、其だつて、花を取りに里から日歸をするると云ふ、姉さんと一所に行くんだ、急に日が暮れて闇にならうとも思はれないが、全く是限で、一足づゝ出さへすりや、美女ヶ原になりますか。」

「え、譯はございませぬ、貴方、そんなに可恐處と御存じで、其の上、お薬を探りに入らしたのでございませぬか。」

言下に、

「實際命懸で來ました。」と思ひ入つて答へると、女はしめやかに、

「それでは、よく／＼の事でおあんなさいませうねえ。」

でも何もそんな難しい御山ではありません。但此處は靈山とか申す事、酒を覆したり、竹の皮を打棄つたりする處ではないのでございます。まあ、難有いお寺の庭、お宮の境内、上つ方の御門の内のやうな、歩けば石一つありませんでも、何となく謹みませんと成りませんばかりなのでございます。而して貴方は、美女ヶ原にお心覺えの草があつて、其處までお越し遊ばすに、二日も三日もお懸りなさらねばなりませんやうな氣がすると仰有いますが、何時か一度お上り遊ばし

「た事がございますか。」

「一度あるです。」

「まあ。」

「確に美女ヶ原と云ふ其でせうな、何でも躑躅や椿、菊も藤も、原一面に咲いて居たと覺えて居ます。けれども土地の名どころぢやない、方角さへ、何處が何だか全然夢中。」

「今だつて猶且、私は同一此の國の者なんですが、其時は何爲か家を出て一月餘、山へ入つて、彼是、何ども生れてから死ぬまでの半分は徜徉つて、漸々其處を見たやうに思ふですが。」

高坂は語りつゝも、長途に苦み、雨露に曝された當時を思ひ起すに付け、今も、氣弱り、神疲れて、爰に深山に塵一つ、心に懸らぬ折ながら、猶且つ垂々と背に汗。

絲のやうな一條路、背後へ聲を運ぶのに、力を要した所爲もあり、藥王品を胸に抱き、杖を持つた手に帽を脱ぐと、清き額を拭ふのであつた。

其と見る目も敏く、

「もし、御案内がてら、あの、私がお前へ参りませう。どうぞ、其の方がお話も承りようございませうから。」

一議に及ばず、草鞋を上げて、道を左へ片避けた、足の底へ、草の根が柔に、葉末は脛を隠し

たが、裾を引く荊も無く、天地閑に、蟲の羽音も聞えぬ。

三

「御免なさいまし。」

と花賣は、袂に留めた花片を惜やはらしく、袖を胸に引合せ、身を細くして、高坂の體を横に擦抜けた其片足も葎の中、路は然ばかり狭いのである。

五尺ばかり前にすらりと、立直る後姿、裳を籠めた草の茂り、近く縁に、遠く淺葱に、日の色を隈取る他に、一本のありて長く影を倒すあらず。

背後から聲を掛け、

「大分草深くなりますな。」

「段々頂が近いんですよ。やがて此の生が人丈になつて、私の姿が見えませんかやうになりますと、其を潜つて出ます處が、もう花の原でございませう。」

と撫肩の優しい上へ、笠の紐弛く、紅のやうな唇をつけて、横顔で振向いたが、清しい目許に笑を浮べて、

「奈何して貴方は那樣にまあ唐天竺とやらへでもお出で遊ばすやうに遠い處とお思ひなされるので

「いませう。」

高坂は手なる杖を荒く支いて、土を騒がす事さへせず、慎んで後(あと)に續き、

「久しい以前(いぜん)です。一體誰(だれ)でも昔(むかし)の事は、遠く隔(へだ)つたやうに思(おも)ふのですから、事柄(ことがら)と一所(いっしょ)に路(みち)までも遙(はるか)に考(かんが)へるのかも知(し)れませんが、而(さう)して先(ま)づ皆(みな)夢(ゆめ)ですよ。

けれども不(ふ)残(ざん)事(じ)實(じつ)で。

私(わたし)が以前(いぜん)美女(びよ)ヶ原(はら)で、藥(やく)草(そう)を採(と)つたのは、もう二十年(ねん)、十年(ねん)が一(ひと)昔(むかし)、ざつと二(ふた)昔(むかし)も前(まへ)になるです、九(こ)歳(さい)の年(とし)の夏(なつ)。」

「まあ、そんなにお稚(ちひ)い時(とき)。」

「尤(も)も一人(ひとり)ぢやなかつたです。然(さ)る人(ひと)に連(つ)れられて來(き)たですが、始(は)め家(いえ)を迷(まよ)つて出(で)た時は、東(とう)西(さい)も辨(わ)かぬ、取(と)つて九(こ)歳(さい)の小(こ)兒(ご)ばかり。

人(ひと)は高(かう)坂(さか)の光(みつ)、私(わたし)の名(な)です、ね、光(みつ)坊(ぼう)が魔(ま)に捕(と)られたのだと言(い)ひました。よく此(こ)の地(ち)で言(い)ふ、那(あの)、天(てん)狗(く)に攫(さら)はれた其(それ)です。又(また)實(じつ)際(さい)然(さ)うかも知(し)れんが、幼(せま)心(こころ)で、自(じ)分(ぶん)ぢや一(いつ)端(ぱん)親(おや)を思(おも)つたつもりで。

未(ま)だ兩(ふた)親(おや)ともあつたんです。母(は)親(おや)が大(だい)病(びやう)で、暑(あつ)さの取(と)附(つき)には最(も)う醫(い)者(しや)が見(み)放(はな)したので、何(ど)うかして其(それ)を復(なほ)したい一心(いっしん)で、藥(くすり)を採(と)しに來(き)たんですな。」

高(かう)坂(さか)は少(しば)時(じ)黙(だま)つた。

「恚(いか)う言(い)ふと、何(なに)か、然(さ)も孝(かう)行(かう)の吹(ふ)聴(ちやう)をするやうで人(ひと)聞(き)が惡(わる)いですが、姉(ねえ)さん、貴(あなた)女(な)ばかりだから話(はなし)をする。」

今(いま)でこそ、立(り)派(ぱ)な醫(い)者(しや)もあり、病(びやう)院(いん)も出(で)來(き)たけれど、奈(どう)何(なに)して城(じやう)下(か)が二(に)里(り)四(し)方(ほう)に開(ひら)けて居(ゐ)つた、北(ほく)國(こく)の山(やま)の中(なか)、醫(い)者(しや)らしい醫(い)者(しや)も無(な)い。まあ、其(その)頃(ころ)、土(とち)地(だい)第(だい)一(いち)といふ先(せん)生(せい)まで匙(さ)を投(な)げて了(しま)しました。打(うち)明(あ)けて、父(ちち)が私(わたし)に聞(き)かせるわけのものぢやない。母(おつ)様(さま)は病(びやう)氣(き)が惡(わる)いから、大(お)人(ひと)しく爲(な)るよ、くらゐにしてあつたんですが、何(なん)となく、人(ひと)の出(で)入(いり)、家(うち)の者(もの)の起(た)居(ゐ)舉(あ)動(どう)、大(だい)病(びやう)といふのは知(し)れる。

それ(それ)に其(その)名(めい)醫(い)と云(い)ふのが、五(ご)十(じゅう)恰(ちやう)好(こう)で、天(あ)窓(ま)の元(げん)げた癖(くせ)に髮(かみ)の黒(くろ)い、色(いろ)の白(しろ)い、ぞろりとした優(やさ)形(がた)な親(おや)仁(ぢ)で、脈(みやく)を取(と)るにも、蛇(じや)の目(め)の傘(かさ)を差(さ)すにも、小(こ)指(ゆび)を反(そ)して、三(さん)本(ぼん)の指(ゆび)で、横(よこ)笛(ふえ)を吹(ふ)くか、女(ぢや)郎(らう)が煙(たば)管(かん)を持(も)つやうな手(て)付(つき)をする、好(す)かない奴(やつ)。

私(わたし)がちよこ、近(きん)處(じよ)だから駈(か)だしては、藥(くすり)取(と)りに行(い)くのでした、又(また)藥(やく)局(きよく)といふのが、其(その)先(せん)生(せい)の甥(せむ)とか云(い)ふ、ぺろりと長(なが)い顔(かほ)の、額(ひたひ)から紅(べに)が流(なが)れたかと思(おも)ふ鼻(はな)の尖(さき)の赤(あか)い男(をとこ)、藥(やく)筆(ふで)笥(かき)の小(こ)抽(ひ)斗(た)を抜(ぬ)いては、机(つく)の上(うへ)に紙(かみ)を並(なら)べて、調(てう)合(が)をするですが、先(ま)づ其(その)匙(さ)加(か)減(げん)が如(い)かにも怪(あや)しい。

相(さう)應(おう)に流(なが)行(かう)つて、藥(くすり)取(と)りも多(おほ)いから、手(て)間(ま)取(と)るのが焦(こ)つたさに、始(し)終(じゆう)行(かう)くので見(み)覺(おぼ)えて、私(わたし)が其(その)

の抽斗を抜いて五つも六つも薬局の机に並べて遣る、終には、先方の手を待たないで、自分で調合をして持つて歸りました。私の爲る方が、却つて目方が揃ふくらゐ、大病だつて何だつて、そんな覺束ない薬で快くならうとは思へんぢやありませんか。其の頃父は小立野と言ふ處の、験のある薬師を信心で、毎日參詣爲るので、私も一寸々連れられて行つたです。

後は自分ばかり、乳母に手を曳かれてお詣を爲ましたツけ。別に拜みやうも知らないで、唯、母親の病氣の快くなるやうと、手を合せる、それも遊び半分。

六月の十五日は、私の誕生日で、其の日、月代を剃つて、湯に入つてから、紋着の袖の長いのを被せて貰ひました。

私がと言つては可笑いでせう。裾模様五ツ紋、熨斗目の派手な、此頃聞きや加賀染とか云ふ、菊だの、萩だの、櫻だの、花束が紋に成つて居る、時節に構はず、種々の花を染交せてあります。尤も今時そんな紋着を着る者はない、他國には勿論ないですね。

一體此の醫王山に、四季の花が一時に開く、其の景勝を誇る爲に、加賀ばかりで染めるのだからうですな。

まあ、其の紋着を着たんですね、博多に緋の一本獨鈷の小兒帯なぞで。

坊やは綺麗に成りました。母も後毛を搔上げて、而して手水を使つて、乳母が背後から羽織らせた紋着に手を通して、胸へ水色の下じめを巻いたんだが、自分で、帯を取つて、よようとすると、それなり力が抜けて、膝を支いたので、乳母が慌てて確乎抱くと、直に天鵝絨の括枕に鳩尾を壓へて、其の上へ胸を伏せたですよ。

産んで下すつた禮を言ふのに、唯御機嫌好うとさへ言へば可いと、父から言ひつかつて、枕頭に手を支いて、其處へ。顔を上げた私と、枕に凭れながら、熟と眺めた母と、顔が合ふと、坊や、最う復るよと言つて、涙をばら／＼、差俯向いて弱々と成つたでせう。

父が肩を抱いて、徐と横に寝かした。乳母が、搔卷を被せ懸けると、襟に手をかけて、向うを向いて了ひました。

臺所から、中の室から、玄關あたりは、ばた／＼人の行交ふ音。尤も帯をしめようとして、濃いお納戸の紋着に下じめの装で倒れた時、乳母が大聲で人を呼んだです。

やがて醫者が袴の裾を、する／＼とやつて駈け込んだ。私には戸外へ出て遊んで来いと、乳母が言つたもんだから、庭から出たです。今も忘れない。何とも言ひやうのない、悲しい心細い思ひが爲ましたな。」

花賣は聲細く、

「御道理でございますねえ。而して母様は其後快くお成りなさいましたの。」  
「お聞きなさい、それからです。」

小兒は切て佛の袖に縫らうと思つたでせう。小立野と言ふは場末です。先づ小さな山くらゐは  
ある高臺、草の茂つた空地澤山な、人通りの無い處を、其の藥師堂へ參つたですが。

朝の内に月代、沐浴なんか爲て、家を出たのは正午過だつたけれども、何時頃藥師堂へ參詣し  
て、何處を歩いたのか、奈何して寝たのか。

翌朝は其の小立野から、八坂と言ひます、八段に黒い瀧の落ちるやうな、眞暗な坂を降りて、  
川端へ出て居た。川は、鈴見といふ村の入口で、流も急だし、瀬の色も凄いです。

橋は、雨や雪に白つちやけて、長いのが處々、鱗の落ちた形に中弛みがして、のらくくと架つ  
て居る其の橋の上に茫然と。

後に考へてこそ、翌朝なんです、其の節は、夜を何處で明かしたか分らないほどですから、  
小兒は晩方だと思ひました。此の醫王山の頂に、眞白な月が出て居たから。

然し残月であつたんです。何爲かと云ふに其の日の正午頃、すつと上流の怪しげな渡を、綱に  
掴まつて、宙へ釣されるやうにして渡つた時は、顔が赫とする晃々と烈い日當。

恚う言ふと、何だか明方だか晩方だか、宛然夢のやうに聞えるけれども、渡を渡つたには全く

渡つたですよ。

山路は一日がかりと覺悟をして、今度來るには麓で一泊したですが、昨日丁度前の時と同じ時  
刻、正午頃です。岩も水も眞白な日當の中を、あの渡を渡つて見ると、二十年の昔に變らず、船  
着の岩も、船出の松も、確に覺えがありました。

然し九歳で越した折は、爺さんの船頭が居て船を扱ひましたつけ。

昨日は唯綱を手繰つて、一人で越したです。乗合も何も無い。

御存じの烈しい流で、棹の立つ瀬は無いですから、綱は二條、染物をしんし張に爲たやうに隙  
間なく手懸が出来て居る。船は小さし、胴の間へ突立つて、釣下つて、互違に手を掛けて、川幅  
三十間ばかりを小半時、幾度もはつと思つちや、危さに自然に目を塞ぐ。其の目を開ける時、も  
し、あの丈の伸びた菜種の花が斷崖の巖越に、ばら／＼見えんでは、到底此の世の事とは思はれ  
なかつたらうと考へます。

十里四方には人らしい者も無いやうに、船を纜つた大木の松の幹に立札して、渡船錢三文とあ  
る。

取草藥

話は前後に成りました。

其處で小兒は、鈴見の橋に亘んで、前方を見ると、正面の中空へ、佛の掌を開いたやうに、



五本の指の並んだ形、轟々立つたのが戸室の石山。霧か、霧か、後を包んで、年に二三度好く晴れた時で無いと、蒼く顯れて見えないのが、即ち此の醫王山です。

其處に此の山が有るくらゐは、豫て聞いて、小兒心にも方角を知つて居た。而して迷子に成つたか、魔に捉られたか、知れもしないのに、稚な者は、暢氣ぢやありませんか。

それが既に氣が變に成つて居たからであらうも知れんが、お腹が空かぬだけに一向苦に成らず。壞れた竹の欄干に掴つて、月の懸つた雲の中の、彼が醫王山と見て居る内に、橋板をことごとく踏んで、

向の山に、猿が三疋住みやる。中の小猿が、能う物饒舌る。何と小兒等花折りに行くまいか。今日の寒いに何の花折りに。牡丹、芍薬、菊の花折りに。一本折つては笠に挿し、二本折つては、蓑に挿し、三枝四枝に日が暮れて……と不圖唄ひながら……

何となく心に浮んだは、あゝ、向うの山から、月影に見ても色の紅な花を採つて来て、それを母親の髪に挿したら、屹度病氣が復るに違ひないと言ふ事です。又母は、其の花を簪にしても似合ふくらゐ若かつたですな。

高坂は舊來た方を顧みだが、草の外には何も無い、一步前へ花賣の女、如何にも身に染みて聞くやうに、俯向いて行くのであつた。

「そして確に、其が薬師のお告であると思つたですな。

さあ思ひ立つては矢も楯も堪らない、渡り懸けた橋を取つて返して、堤防傳ひに川上へ。

後で又渡を越えなければならぬ路ですがね、橋から見ると山の位置は月の入る方へ傾いて、却つて此處から言ふと、對岸の行留りの雲の上らしく見えますから、小兒心に取つて返したのが丁ど幸と、橋から渡場まで行く間の、あの、岩淵の岩は、人を隔てる醫王山の一の砦と言つても可い。戸室の石山の麓が直に流に迫る處で、累り合つた岩石だから、路は其處で切れるですものね。

岩淵を此方に見て、大方跣足で居たでせう、すたゝ五里も十里も辿つた意で、正午頃に着いたのが、鳴子の渡。

四

「馬士にも、荷擔夫にも、畑打つ人にも、三人二人ぐらゐ宛、村一つ越しては川沿の堤防へ出る毎に逢つたですが、皆唯立停つて、じろく見送つたばかり、言葉を懸ける者は無かつたです。是は鬨斗目の紋着振袖と云ふ、田舎に珍しい異形な扮装だつたから、不思議な若殿、迂濶に物も言へないと考へたか、眞晝間、狐が化けた？とでも思つたでせう。其とも本人逆上返つて、何を

言はれても耳に入らなかつたのかも解らんですよ。

弗と其の渡場の手前で、背後から始めて呼び留めた親仁があります。兄や、兄やと太い調子。

私は仰向いて見ました。

つんぐり脊の高い、銅色の巖乗造な、年配四五六、古い単衣の裾をぐいと端折つて、赤脛に脚絆、素足に草鞋、くわつと眩いほど日が照るのに、笠は被らず、其の菅笠の紐に、桐油合羽を疊んで、小さく縦に長く折つたのを結へて、振分けに爲て肩に投げて、兩提の煙草入、大きいのをぶら提げて、奈何云ふ氣か、漣團扇で、はたくと胸毛を煽ぎながら、てくりと寄つて来て、何處へ行くだ。

御山へ花を取りに、と返事すると、ふん其ならば可し、小父が同士に行つて遣るべい。但、此の前の渡を一つ越さねばならぬで、渡守が咎立をすると面倒ぢや、さあ、負され、と云うて背中を向けたから、合羽を跨ぐ、足を向うへ取つて、猿の兒背負、高く肩車に乗せたですな。其の中も心の急く、山はと見ると、戸室が低く成つて、此の醫王山が鮮明な深翠、肩の上から下に瞰下されるやうな氣が爲ました。位置は變つて、川の反對の方に見えて来た、成程渡を渡らねば成りませぬ。

足を壓へた片手を後へ、腰の兩提の中をちやらく爲せて、爺様頼んます、鎮守の祭禮を見に、頼まれた和郎ぢや、と言ふと、船を寄せた老人の腰は、親仁の兩提よりもふらくして干柿のやうに干からびた小さな爺。

やがて綱に掴まつて、縋ると疾い事!

雀が鳴子を渡るやう、猿が梢を傳ふやう、さらく、さつと。

高坂は思はず足踏をした、草の茂がむらくと揺いで、花片が又もや散り来る——二片三片、虚空から。

「左右へ傾く舷へ、流が蒼く翫み着いて、眞白に颯と翻ると、乗つた親仁も馴れたもので、小兒を擔いだま、仁王立。

眞蒼な水底へ、黒く透いて、底は知れず、目前へ押被さつた大巖の肚へ、ぴたりと船が吸寄せられた。岸は可恐く水は深い。

巖角に刻を入れて、是を足懸りにして、此方の堤防へ上るんですな。昨日私が越した時は、先づ第一番の危難に逢ふかと、膏汗を流して漸々縋り着いて上つたですが、何、其の時の親仁は……平氣なものです。」

高坂は莞爾して、

「爪尖を懸けると更に苦なく、負さつた私の方が却つて目を塞いだばかりでした。

扱、些と歩行かつせえと、岸で下してくれました。其からは少しづつ、次第に流に遠ざかつて、田の畦三つばかり横に切れると、今度は赤土の一本道、兩側にちらほら松の植わつて居る處へ出ました。

六月の中ばとは云つても、此邊には珍しい酷暑の日だと思ひましたが、川を渡り切つた時分から、戸室山が雲を吐いて、處々田の水へ、眞黒な雲が往つたり、來たり。

並木の松と松との間が、どんよりして、梢が鳴る、と思ふとはや大粒な雨がばらばら、立樹を五本と越えない中に、車軸を流す烈しい驟雨。ちよつ待て、と獨言して、親仁が私の手を取つて、そら、臺なしに成るから脱げと言ふまゝ、にすると、帯を解いて、紋着を剥いで、淺葱の襟の細く掛つた襦袢も残らず。

小兒は絲も懸けぬ全裸體。

雨は浴るやうだし、恐さは恐し、ぶる／＼顛へると、親仁が、強いぞ強いぞ、と言つて、私の衣類を一丸げにして、懷中を膨らますと、紐を解いて、笠を一文字に冠つたです。

それから幹に立たせて置いて、やがて例の桐油合羽を開いて、私の天窓からすつぽりと目ばかり出るほど、宛然澁紙の小兒の小包。

いや！ 出來た、これなら海を潛つても濡れることでは無い、さあ、眞直に前途へ駆け出せ、

曳、と言つて、板で打たれたと思つた、私の臀をびたりと一つ。

濡れた團扇は骨ばかりに裂けました。

怪飛んだやうに成つて、蹠踏けて土砂降の中を飛出すと、くるりと合羽に包まれて、見えるは脚ばかりぢやありませんか。

赤蛙が化けたわ、化けたわと、親仁が呵々と笑つたですが、もう耳も聞えず眞暗三寶。何か黒山のやうな物に打付かつて、斛斗を打つて仰様に轉ぶと、瀧のやうな雨の中に、ひ、んと馬の嘶く聲。

漸々人の手に扶け起されると、合羽を解いて呉れたのは、五十ばかりの肥つた婆さん。馬士が一人腕組をして突立つて居た。門の柳の翠から、黒駒の背へ雫が流れて、はや雲切がして、其の柳の梢などは薄雲の底に蒼空が動いて居ます。

妙なものが降り込んだ。これが豆腐なら資本入らずぢや、其とも此ま、熨斗を附けて、鎮守様へ納めさつしやるかと、馬士は掌で吸殻をころ／＼遣る。

主さ、何うした、と婆さんが聞くんですが、四邊をきよと／＼胸すばかり。

何處から出た乞食だよ、と又酷いことを言ひます。尤も裸體が澁紙に包まれて居たんぢや、氏素性有らうとは思はぬ筈。

衣物を脱がせた親仁はと、唯悔しく、来た方を眺めると、脊が小さいから馬の腹を透かして雨上りの松並木、青田の縁の用水に、白鷺の遠く飛ぶまで、啜かすつと見渡されて、西日がほんのり紅いのに、急な大雨で往來もばつたり、其の親仁らしい姿も見えぬ。

餘の事にしく／＼泣き出すと、こりや餒うて口も利けぬな、商賣品で錢を嚙ませるやうぢやけれど、一つ振舞うて遣ろかいと、汚い土間に縁臺に並べた、狭ツくるしい暗い隅の、苔の生えた桶の中から、豆腐を半挺、皴手に白く積んで、そりや／＼と、頬邊の處へ突出してくれたですが、奈何して是が食べられますか。

其癖腹は干されたやうに空いて居ましたが、胸一杯に成つて、頭を掉ると、はて食好をする犬の、と呟いて、ぶくりと又水へ落して、これや、慈悲を享けぬ餓鬼め、出て失せと、私の胸へ突懸けた皴だらけの手の黒さ、顔も漆で固めたやう。

黒婆どの、情無い事せまいと、名も成程黒婆といふのか、馬士が中へ割つて入ると、貸を返せ、此の人足めと怒鳴つたです。すると其の豆腐の桶の有る後が、蜘蛛の巣だらけの藤棚で、是を地境にして壁も垣も無い隣家の小家の、爐の縁に、膝に手を置いて蹲つて居た、十ばかりも年上らしいお媪さん。

見兼ねたか、縁側から摺つて下り、ごつ／＼轉がった石塊を跨いで、藤棚を潜つて顔を出した

が、柔和な面相、色が白い。

小兒衆々々、私が許へござれ、と言ふ。疾く白媪が家へ行かつしやい、借が無くば、此處へ馬を繋ぐではないと、馬士は腰の胴亂に煙管をぐつと突込んだ。

其處で裸體で手を曳かれて、土間の隅を抜けて、隣家へ連込まれる時分には、鳶が鳴いて、遠くで大勢の人聲、祭禮の太鼓が聞えました。

高坂は打案じ、

「渡場から此方は、一生私に忘れられない處なんだね、で今度来る時も、前の世の旅を二度する氣で、松一本、橋一ツも心をつけて見たんだけど、それらしい家も無く、柳の樹も分らない。それに今ぢや、三里ばかり向うを汽車が素通りにして行くやうになつたから、人通もなし。大方、其の馬士も、老人も、最う此の世の者ぢやあるまいと思ふ、私は何だか其の人達の、那のまゝ影を埋めた、丁ど其の上を、姉さん。」

花賣は後姿のまゝ、引留められたやうになつて停つた。

「貴女と二人で歩いて居るやうに思ふですがね。」

「それから奈何遊ばした、まあお話しなさいまし。」

「娘が来て世話をするまで、私には衣服を着せる才覚も無い。暑い時節ぢやで、何とも無かるが、然ぞ餓からうで、是でも食はつしやれつて。」

圍爐裡の灰の中に、ぶす／＼と燻つて居たのを、抜き出してくれたのは、串に刺した茄子の焼いたんで。

ぶく／＼樺色に膨れて、湯氣が立つて居たです。

生豆腐の手握に比べては、勿體ない御料理と思つた。其にくれるのが優しげなお婆さん。

地が性に合ふで好う出来るが、未だ此の村でも初物ぢやと云ふ、其を、空腹へ三つばかり頬張りしました。熱い汁が下腹へ、たら／＼と染みた處から、一睡して目が覺めると、きやく／＼痛み出して、嘔て吐くやら、瀉すやら、尾籠なお話だが七頭八倒。能も生きて居られた事と、今でも思ふです。然し、もう其の時は、命の親の、優しい手に抱かれて居ました。世にも綺麗な娘で。

人心地も無く苦しんだ目が、幽に開いた時、初めて見た姿は、艶かな黒髪を、男のやうな鬘に結んで、緋縮緬の襦袢を片肌脱いで居ました。日が経つて醫王山へ花を探りに、私の手を曳いて、樓に朱の欄干のある、温泉宿を忍んで裏口から朝月夜に、田圃道へ出た時は、中形の浴衣に襦子の帯をしめて、鎌を一挺、手拭にくるんで居たです。其間に、白嫗の内を、私を膝に抱いて出た時は、鬘を唐輪のやうに結つて、胸には玉を飾つて、丁ど天女のやうな扮装をして、車を牛に

曳かせたのに乗つて、わい／＼と云ふ群集の中を、通つたですが、村の者が交る／＼高く傘を撃掛けて練つたですな。

村端で、寺に休むと、此處で支度を替へて、多勢が口々に、御苦勞、御苦勞と云ふのを聞棄てに、娘は、一人の若い者に負させた私に一寸頬摺をして、それから、石高路の坂を越して、賑かに二階屋の揃つた中の、一番屋の棟の高い家へ入つたですが、私は唯幽に呻吟いて居たばかり。尤も白姥の家に三晩寝ました。其の内も、娘は外へ出ては歸つて来て、膝枕を爲せて、始終集つて来る馬蠅を、拂つてくれたのを、現に苦みながら覺えて居ます。車に乗つた天女に抱かれて、多人數に圍まれて通つた時、庚申堂の傍に榛の木で、半ば姿を祕して、群集を放れてすつくと立つた、脊の高い親仁があつて、熟と私どもを見て居たのが、確に衣服を脱がせた奴と見たけれど、小兒は未だ口が利けないほど容體が悪かつたんですな。

私はたゞ其の氣高い艶麗な人を、今でも神か佛かと、思ふけれど、後で考へると、先づ恚うだらうと、思はれるのは、姥の娘で、清水谷の温泉へ、奉公に出て居たのを、祭に就いて、村の若い者が借りて来て八ヶ村九ヶ村を是見よと喚いて歩行いたものでせう。娘は不圖すると、湯女などであつたかも知れないです。」

「それから其の人の部屋とも思はれる、綺麗な小座敷へ寝かされて、目の覚める時、物の欲しい時、咽の乾く時、涙の出る時、何時も其の娘が顔を見せない事は無かつたです。

自分でも、もう、病氣が復つたと思つた晩、手を曳いて、てら／＼光る長い廊下を、湯殿へ連れて行つて、一所に透通るやうな温泉を浴びて、岩を平にした湯槽の傍で、すつかり體を流してから、櫛を抜いて、私の髪を柔く梳いてくれる二櫛三櫛、馳て其の櫛を湯殿の岩の上から、廊下の灯に透して、氣高い横顔で、熟と見て、あ、好い事、美しい髪も抜けず、汚い蟲も付かなかつたと言ひました。私も氣がさして一所に櫛を置めたが、自分の膚も、人の體も、其の時くらゐ清く、白く美しいのは見た事がない。

私は新しい着物を着せられ、娘は桃色の扱帯のまゝ、又手を曳いて、今度は裏梯子から二階へ上つた。其の段を昇り切ると、取着一室、新しく建増したと見えて、襖がない、白い床へ、月影が潑と射した。兩側の部屋は皆陰々と灯を置いて、鎮り返つた夜半の事です。

好い月だこと、まあ、と其のまゝ、手を取つて床板を踏んで出ると、小窓が一つ。其にも障子が無いので、二人で覗くと、前の藁は露が流れて、銀が溶けて走るやう。

月は山の端を放れて、半腹は暗いが、眞珠を頂いた峰は水が澄んだか明るいので、山は、と聞くと、醫王山だと言ひました。

途端にくわいと狐が鳴いたから、娘は緊乎と私を抱く。其胸に額を當てて、私は我知らず、わつと泣いた。

怖くは無いや、否怖いのは無いと言つて、母親の病氣の次第。

恚いふ澄み渡つた月に眺めて、其の色の赤く輝く花を探つて歸りたいと、始めて此の人ならばと思つて、打明けて言ふと、暫く黙つて瞳を据ゑて、私の顔を見て居たが、月夜に色の眞紅な花——屹度探ませうと言つて、——可し、可し、女の念で、と後を言ひ足したです。

翌晩、夜更けて私を起しますから、素より此方も目を開けて待つた處、直ぐに支度をして、爾時、帯をきり、とゞめた、引掛に、先刻言ひましたね、刃を手拭でくる／＼と巻いた鎌一挺。それから昨夜の、其の月の射す窓から密と出て、瓦屋根へ下りると、夕顔の葉の搦んだ中へ、梯子が隠して掛けてあつた。傳つて庭へ出て、裏木戸の鍵をがらりと開けて出ると、有明月の山の裾。

醫王山は手に取るやうに見えたけれど、是は祕密の山の搦手で、其處から上る道は無いですから、戸室口へ廻つて、攀ぢ上つたものと見えます。さあ、此處から目差す御山と云ふまでに、

辻堂で二晩寝ました。

後は何う来たか、恐い姿、凄い者の路を遮つて顯る、度に、娘は私を背後に庇うて、其の鎌を差翳し、蟲と立つと、鎧うた姫神のやうに頼母しいにつけ、雲の消えるやうに路が開けてすんずんと。」

時に高坂は布を斷つが如き音を聞いて、唯見ると、前へ立つた、女の姿は、其の肩あたりまで草隠れに成つたが、背後さまに手を動かすに連れて、鋭き鎌、磨ける玉の如く、弓形に出没して、歩行きく、掬切に、刃形が上下に動くと共に、丈なす茅萱半ばかり、凡そ一抱づ、さつくと切れて、靡き伏して、隠れた土が歩一歩、飛々に顯れて、五尺三尺一尺づ、前途に渠を導くのである。

高坂は、悚然として思はず手を舉げ、嘗て婦が我に爲したる如く伏拜んで肅然とした。

其の不意に立停つたのを、行惱んだと思つたらしい、花賣は軽く見返り、

「貴方、最う些とでございますよ。」

「何うぞ。」と云つた高坂は今更ながら言葉さへ謹んで、

「美女ヶ原に今も其花がありませんか。」

「何うも身に染むお話。何うぞ早く後をお聞せなさいまし、而して其の時、其の花はござんした

か。」

「花は全く有つたんですが、何時も然うやつて美女ヶ原へお出の事だから、御存じはないでせうか。」

「參りましたら、其の姉さんがなすつたやうに、一所にお探し申しませう。」

「それでも私は月の出るのを待ちますつもり。其の花籠にさへ一杯に成つたら、貴女は日一杯に歸るでせう。」

「否、いつも一人で往復爲ます時は、馴れて何とも思ひませんが、惣じお連が出来て見ますと、もう寂しくつて一人では歸られませんか、御一所にお歸りまでお待ち申ませう。其の代どうぞ花籠の方はお手傳ひ下さいましな。」

「そりや、云ふまでもありません。」

「而してまあ、甚麽處にございましたえ。」

「其こそ夢のやうだと、云ふのだらうと思ひます。路すがら、然うやつて、影のやうな障礙に出遇つて、今にも娘が血に染まつて、私は取つて殺されうと、幾度思つたか解りませんが、黄昏と思ふ時、其の美女ヶ原といふのでせう。凡八町四方ばかりの間、扇の地紙のやうな形に、空にも下にも充滿の花です。」

其まゝ二人で跪いて、娘が爲るやうに手を合せて居りました。月が出ると、餘り容易い。つい目の前の芍薬の花の中に花片の形が變つて、眞紅なのが唯一輪。

採つて前髪に押頂いた時、私の頭を撫でながら、餘の嬉しさを、娘ははらりと落涙して、もう死ぬまで、此の心を忘れてはなりませんと、私の頭に挿させようと爲ましたけれども、髪は結んで無いのですから、其處で娘が、自分の黒髪に挿しました。人の簪の花に成つても、月影に色は眞紅だつたです。

母様の御大病、一刻も早く、直に、美女ヶ原を後に爲ました。

引返す時は、苦も無く、すらりと下りられて、早や曉の鶏の聲。

嬉しや人里も近いと思ふ、月が落ちて明方の闇を、向うから、洵々と四五人連、松明を擧げて近寄つた。人可懐くいそゝ寄ると、いづれも屈竟な荒漢で。

中に一人、見た事の有る顔と、思ひ出した。黒婆が家に馬を繋いだ馬士で、其の馬士、二人の姿を見ると、遁がすなと突然、私を小脇に引抱へる、残つた奴が三人四人で、えゝ！と云ふ娘を手取足取。

何處を奈何、何の方角を何のくらゐ駈けたか宛然夢中です。

聽て氣が付くと、娘と二人で、大な座敷の片隅に、馬士交り七八人に取巻かれて坐つて居まし

た。

何百年か解らない古襖の正面、板の間のやうな床を背負つて、大胡坐で控へたのは、何と、鳴子の渡を仁王立で越した抜群な其の親仁で。

恍惚した小兒の顔を見ると、過日の四季の花染の袴を、ひたりと目の前へ投げて寄越して、大口を開いて笑つた。

や、二人とも氣に入つた、坊主は兒に成れ、女は其の母に成れ、而して何時までも娑婆へ歸るな、と言つたんです。

娘は亂髪になつて、其の花を持つたまゝ、膝に手を置いて、首垂れて黙つて居た。其の返事を聞く手段で有つたと見えて、私は二晩、土間の上へ、可恐い高い屋根裏に釣つた、駕籠の中へ入れて釣されたんです。紙に乗せて、握飯を突込んでくれたけれど、其が食べられるもんですか。垂から透して、土間へ焚火を爲たのに雪のやうな顔を照らされて、娘が縛られて居たのを見ましたが、其なり目が眩んで了つたです。どんと駕籠が土間に下りた時、中から五六疋鼠がちよろちよろと駈出したが、代に娘が入つて來ました。

薫の高い薬を嚙んで口移しに含められて、膝に抱かれたから、一生懸命に緊乎縋り着くと、背中へ廻つた手が空を撫でるやうで、娘は空蟬の鼓かと思えて、唯た二晩がほどに、絲のやうに瘡



せたです。

最うお目に懸られぬ、あの花染のお小袖は記念に私に下さいまし。然し義理が有りますから、必ず恁處に隠家が有ると、町へ歸つても言ふのではありません、と蒼白い顔して言ひ聞かす中に、駕籠が昇かれて、うとくと十四五町。

奥様、此處まで、と聲がして、駕籠が下りると、一人手を取つて私を外へ出しました。

左右に土下座して、手を支いて居た中に馬士も居た。一人が背中に私を負ふと、娘は駕籠から出て見送つたが、顔に袖を當てて、長柄にはツと泣伏しました。其ツ限。」

高坂は聲も曇つて、

「私を負つた男は、村を離れ、川を越して、遙に鈴見の橋の袂に差置いて歸りましたが、此の男は啞と見えて、長い途に一言も物を言や爲ません。

私は死んだ者が蘇生つたやうに成つて、家へ歸りましたが、丁度全三月経つたです。

花を枕頭に差置くと、其の時も絶え入つて居た母は、呼吸を返して、それから日増に快くなつて、五年経つてから亡くなりました。魔隠に逢つた小兒が歸つた喜びの爲に、一旦本復を爲たのだと云ふ人も有りますが、私は、其の娘の取つてくれた藥草の功德だと思ふです。

それに就けても、恩人は、と思ふ。娘は山賊に捕はれた事を、小兒心にも知つて居たけれども、

堅く言付けられて歸つたから、其頃三ヶ國横行の大賊が、つい私どもの隣の家へ入つた時も、何も言はないで黙つて居ました。

けれども、それから足が附いて、二俣の奥、戸室の麓、岩で城を築いた山寺に、兇賊籠ると知れて、未だ邏卒といつた時分、捕方が多人數、隠家を取巻いた時、表門の眞只中へ、其の親仁だと言ひます、六尺一つの丸裸體、脚絆を堅く、草鞋を引ぬめ、背中へ十文字に引背負つた、四季の花染の熨斗目の紋着、振袖が颯と山嵐に纏れる中に、女の黒髪がはらりと零れて居た。

手に一條大身の槍を掲げて、背負つた女房が死骸でなくば、死人の山を築く筈、無理に手活の花に爲た、申譯の葬に、醫王山の美女ヶ原、花の中に埋めて歸る。汝等見送つても命が無いぞと、近寄つたのを五六人、蹴散らして、ぱつと退く中を、衝と抜けると、岩を飛び、岩を飛び、岩を飛んで、懸て槍を杖いて岩角に隠れて、それなりけりと云ふので、扱はと、それからは私か其の娘に出逢ふ門出だつた誕生日に、鈴見の橋の上まで来ては、此方を拜んで歸りくしたですが、母が亡くなりました翌年から、東京へ修行に參つて、國へ歸つたのは漸と昨年。始終望んで居ました此の山へ、後を尋ねて上る事が、物に取紛れて居る中に、申譯も無い飛んだ身勝手な。

又其の藥を頂かねばならないやうに成つたです。以前は其が爲に類少い女を一人、犠に爲たくらるですから、今度は自分が甚麼辛苦も決して厭はない。いかにも爲て其の花が欲しいですが。」

言ふ中に胸が迫つて、涙を湛へた爲ばかりで無い。弗と、心付くと消えたやうに女の姿が見えないのは、草が深くなつた所爲であつた。

丈より高い茅葺を潛つて、肩で掻分け、頭で避けつゝ、見えない人に、物言ひ懸ける術も無いので、高坂は御經を取つて押戴き、

山川險谷	幽邃所生	芥木藥艸	大小諸樹
百穀苗稼	甘蔗葡萄	雨之所潤	無不豐足
乾地普洽	藥木並茂	其雲所出	一味之水

律の中に日が射して、經卷に、蒼く月かと思ふ草の影が映つたが、見つゝ進む内に、ちら／＼と紅來り、黄來り、紫去り、白過ぎて、蝶の戯るゝ風情して、偈に斑々と印したのは、はや咲交る四季の花。

忽然として天開け、身は雲に包まれて、妙なる薰袖を蔽ひ、唯見ると堆き雪の如く、眞白き中に紅ちらめき、瞶むる瞳に綠映じて、颯と分れて、一つ／＼、花片となり、葉となつて、美女ヶ原の花は高坂の袂に匂ひ、胸に咲いた。

花賣は籠を下して、立休らうて居た。笠を脱いで、襟脚長く玉を伸べて、瑩澤なる黒髪を高く結んだのに、何時の間にか一輪の小さな花を簪して居た、棲はづれ、袂の端、大輪の菊の色白き中に佇んで、高坂を待つて、莞爾と笑む、美しく氣高き面ざし、威ある瞳に屹と射られて、今物語つた人とも覺えず、はつと思ふと學生は、既に身を忘れ、名を忘れて、唯九ツばかりの稚兒に成つた思ひであつた。

「さあ、お話に紛れて遅く來ましたから、もうお月様が見えませう。其までにどうぞ手傳つて花籠に摘んで下さいまし。」

と男を頼るやうに言はれたけれども、高坂は却つて唯々として、恰も神に事ふるが如く、左に菊を折り、右に牡丹を折り、前に桔梗を摘み、後に朝顔を手繰つて、再び、鈴見の橋、鳴子の渡、噉の夕立、黒婆の生豆腐、白姥の焼茄子、牛車の天女、湯宿の月、山路の利鎌、賊の佳家、戸室口の別を繰返して語りつゝ、聴て一巡した時、花籠は美しく満たされたのである。

すると籠は、花ながら花の中に埋もれて消えた。

月影が射したから、伏拜んで、心を籠めて、透かし透かし見たけれども、朧したけれども、見遣つたけれども、ものの薰に形あつて仄に幻かと思ゆるばかり、雲も雪も紫も偏に夜の色に紛るゝのみ。

殆ど絶望して倒れようとした時、思ひ懸けず見ると、肩を並べて齊しく手を合せてすらりと立つた、其の黒髪の花唯一輪、紅なりけり月の光に。

高坂が其の足許に平伏したのは言ふまでもなかつた。

其時肩を落して、美女が手を取ると、取られて膝をすらして縋着いて、その帯のあたりに面を上げたのを、月を浴びて藤長けた、優しい顔で熟と見て、少し頬を傾けると、髪が其方へはらはらとなるのを、密と押へる手に、簪を抜いて、戦く醫學生の襟に挟んで、恍惚爲たが、瞳が動き、「あゝ、お可憐い。思ふお方の御病氣は屹度其で治ります。」

あはれ、高坂が緊乎と留めた手は徒に莖を擱んで、袂は空に、美女ヶ原は咲満ちたまゝ、ゆらゆらと前へ出たやうに覺えて、人の姿は遠く成つた。

立つて追はうと爲ると、岩に牡丹の咲重つて、白き象の大なる頭の如き頂へ、雲に入るやう衝と立つた時、一度其の鮮明な眉が見えたが、月に風無き野となんぬ。

高坂は撞と坐した。

恁て胸なる紅の一輪を葉に、傍の芍薬の花、方一尺なるに經を据ゑて、合掌して、薬王品を夜もすがら。

## 俠言

「へ、へ、へ、何がへ、へ、へ、だ、え、恠う、串戯ぢやねえ、最うお前これ、算へ年で二十七だ、一人持たなくつちや不可えぢやねえか。」  
壯俊は額を擦つて、

「だつて、兄哥。」

「だつて兄哥ぢやねえ、何も己が女房にならうとは言やしねえ。」

「知れたこつたあね、何處の國にか兄弟分の男を女房にするものがありますか、何も念を入れずとももの事ぢやないか、そんなくだらないことを謂つて飲んでるから何時でも話がこんがらかつて、何が何だか些とも分らなくなつたふんだよ、今日は眞面目に相談をおし、お前さんも條が通るまで酔つちや不可いよ、長さんも我慢をおし、事が極りやおめでたいんだから、私が半纏を脱いで五合買ひますよ。」と女房が口を添へる。此の亭主で即ち長の兄哥なるもの、長火鉢の傍に弟分と差向ひで、

「前祝だ、飲まねえぢや景氣が悪い。何もこれ意見を謂ふんぢやなし、お酒で運をつけなけりや長も己も話が迂らねえ、熱いのをつけやな。」

「ぢや、祝つて酌がうよ、さあ長さん。」

「え、未だあります、ト、ト、ト、姉さん何ですかね、兄哥が女房を世話してくれようと謂ふんで。」

「あ、先方は御の字なんだよ、是非其お前さんに、正月だといふのに、そんな鍵裂のした衣服なんか着せて置きたくないんだとさ。」

「何うも難有うございます。」

「兄哥遮つて、

「やい、禮を謂ふな、禮を。何よ、待ちねえ、何だつけか焦つたい。」

女房少も分らず、

「何さ、」

「あの、それ、己が花主場の丸鐵の御隠居が疑つて居る。」

「講釋かね。」

「いんにや、川柳よ、川柳、其にあら、恠うだに因つてト、厚く禮いはるゝ戀は出来ぬなりッ、

何うも思召は難有う。幾重にもお禮をと來ちや、おあひだだ、内の此奴なんぞも不出來にや不出來だけれど、散々依怙地を仕抜いた擧句に、己が口から、恚う仕様がねえ、不自由でおらあ最う、うんざりしたから、臺所の始末をしてくんねえ、と口説くとな、

(様あ見やがれ。)といつて忽ち承知だ、何うだ、不出來だらう、しかし御禮申された部ぢやねえから、出來たにや出來たのよな。」

「何を謂つてるのさ。」と銅壺に突込んである徳利の口を、拜んだ手つきで壓へながら、女房は面を背ける。

「先づ、おのが、恥を謂はねえけりや理が聞えねえ。」

「そんな理は聞えなくつても可いよ。」

「然う、また理を嫌ふことはない、質の流月ぢやあるめえし。」

「可い加減になさいよ。」

と横を向いたまゝ、膳の上へ丁と置いて、

「最う酔つてるよ、厭なんだ、ねえ長さん。」

「何酔ふもんか、さあ、もつと熱いのを、」

「長さんは温いのが好なんだわ。」

しばらくして、大業に、

「はッ、いかさまな、長、汝の好をば、己らより媽々の方で御存じだ、婦人といふものは行届いた優しいもんだ、恚う人の女房で恚うだから、さて、自分のとなつて見ねえ、そりや口でいふやうなもんぢやねえ、面と向つてこそ、やい、七面鳥と遣ツつけるが、蔭ぢや拜んでら、眞個のことだ。」

「不可え、意見だか、恚氣だか、こりや譯がわからねえ。」

女房は嬉しさう、但しさうを煙草とともに飲込んで眞面目、

「まツたくさ、長さん、私をくらべものにしちや、テンから破談だけれど、お前さんに相談をしようといふのはね、そりや最う、何うも、何ともいひやうのない姉さんだよ。」

二

力を入れて染々と謂はれたので、壯俊も些と更つた形で、兩提の煙草入、煙管を膝に取つて捻りはじめた。

言 俠

「姉さん、誰です。」

「まあ、長さんの方から極なくツちや。」

「お前、兎も角も女房を持つ氣か、持たねえ氣か、其を、極めてからでなくツちや話が出来ねえ。」  
「思切つて、お持ちよ。」

「馬鹿なことを、思ひ切つて持つ奴があるもんかい、思ひ切らずに持つんだ。」

「何をくだらない、何だつて可いぢやないか、眞個にさ、長さん、然うすりや、意見をされなくツたつて、自然に、遊びも留むわ、酒もひかへるわ。」

「姉さん、私あ、そんなんぢやねえ、女房を持つたつて、何の。」

「まあ、可いよ、そんなことは後の話、夫婦になつてから、良人の身持の治る、治らないは、そりや女房の腕次第、差當つて、橋渡の私等が兎や角う謂ふことはないがね。何しろ、良い腕を持つて居る癖に、獨身ものの悲さぢやないか。晩のお茶に昆布巻を買つて歸つて、懷中中汁だらけになんぞしないやうに、早くおしなさいよ眞個にさ。」

「だつて、昆布巻の加減の好いのは一寸異……」

「皆まで謂はせず、

「長、やい、そんなことを謂ふな、其の昆布巻だつて構はねえから、一人で寝るなといふことだあな。」

「媽々、だね、」

「む、」

「をかしいな、ま、最う一ツおくんなさい。」とつめかけた煙草を其まゝ差置いて一口煽つた。

「私あ貰つても其の何だから、女房はをかしいや。」

「何がをかしい。」

「だつて、友達が何だからね。」

「待ちねえ、お前の友達なら、皆おれの友達だ、其の俺が世話をするんだから、一言もあるめえ、誰が何といふもんか。」

「然うかね。」

と指出す猪口について酌して、

「貰ふ氣か。」

長は黙つて又傾けた。

「ねえ、長さん。」

「姉さん、まあ誰なんです。」

「これをいつた日にや。」

「お待ちよ、私からいふから。」

「何でもこりやささきへ謂つた方が眞先に、長に大恩を被せるのだ、あのな。」  
「あれさ、私が一生恩人になるんですよ。一寸、」  
「黙んねえ。」

「こりや、驚いた、可いよ、恩に被るなら二人とも被るよ。姉さんに小遣を強請つたつて、兄哥に内證にしちや置かねえ。又、兄哥に世話になつたつて、姉さんに禮をいはねえで居たことはありませんや。」

兄哥、がツくりとうつむき、

「あ、能くいつてくれたい、慥う頼母しいぜ、其處へ惚れたんだな、實は何だ、お正月だから姉さんの名もおめでてえや、名はおめでてえが人間は甘えんぢやねえ、柄こそすらりと大いが、キリ、として、頭、とやられると、此の方でもピリ、と應へようといふ、ソレ知つて居よう、松屋の、ソラ、」

「え、」

「お梅さんだ。」

「兄哥、兄哥！」

「む、」

「串戯をいつちやいけねえ。」

「ね、御覽なさい、及びもない、御大家のお嬢さんだから、仕やうがないけれど、これで、媒妁役すりや私たちは、一生お前さんの氏神だよ。」

「何うだ。」

「だつて女房だなんて可笑いぜ。」

「ぢや、何うする。」

「私は貫つて、友達で付き合いはう。」

三

「一寸、御覽な、あれ、お前さん長さんが、あんな可愛いことをお謂ひだよ、友達にして附合ふとさ、私はお梅さんが、彼處へ惚れたんだらうと思ふよ。」

「何處でも可い、芝でも本郷でも、路地でも、突當りでも可いが、然う事が極つたら、こゝで相談だ、長、と更まる。」

俠

「何え。」

「まづ、其の酒を控へろ、おつと、今夜ぢやねえ。いや、又、今夜には限らねえ、俺が内へ来て、」

媽々の酌で飲むくらゐ、いくらがものだ、構はねえが、纏つた錢を握りや、足を拂いて會席茶屋へ駆け上る。井の底を探しちゃ、天麩羅で五錢が爛よ、さもしくなると、中をくんねえで、にごり屋の賣出を狙つて、淺草と、深川と酢章魚の脚と、芋の煮つけの大小を較べるのは何たることだ、俺が聞いたつて感心しねえ、堅氣な方に聞かして見ろい。それから遊びだ。」

「一言もあるめえ。而してお前、しばらく辛抱をしてよ、縞ものでも可いから羽織の一枚も引かけねえ。」

「私あこれで澤山です。」

「何、澤山なことがあるものか、お前は澤山でも、それぢや先方様へ話が出來ねえ、それからまあ、いかに獨身もので構はねえたつて、曲んだ格子戸を開けて入ると、竹の皮を投出した土間に、アノ冷飯草履を二三足脱棄てにしたのは恐しいぜ、雪駄でも買つてよ、前桐でも可いから、二三ヶ月堪忍をして簞笥の棹も買はねえか、何より重寶なのは長火鉢だ、こりや是非一個なくてはならずよ、急に鐵瓶にも及ぶめえが、土瓶でも可いから据りの好い、ひッたけの入れねえのをかけるんだ。屑籠にも土瓶敷にも、煮るにも、焼くにも、炊くにも、七輪ばかりは始末が悪いや。一寸二ツ竈といふと、おツくふだが、一ツ備へつけることにするんだな。」

「長さん、佐竹ッ原なんぞにや、いくらも又出ものがあります、私が一所に行つて見て上げよう、それからね、對手が對手だからね、腰板の處が捻れても大事なから、袴の工面をおし。而して、さあ話が始まるといふ日になりや、人の出入もあらうし、手あぶりも買はなきやならず、火箸一ツだつて、角の天井を取つたあとの杉箸を突刺しちや、燻つて仕やうがなからうぢやないか。」

「ありやね、魚勤が、歳暮に呉れました魚串の改良でさ、姉さんお前、姑がねえと思つて、杉箸を煙つたがらア、贅澤だ。」と酒はまはつたが、眞顔でいふ。

「あれさ、」

「亂暴だな、恚う申戯ぢやねえぜ、人が眞剣で世話を焼くのを、茶かして居やがる。」

「壯俊は苦笑して、」

「だつて、お前さん方、松屋のお梅さんなんて、可加減な事をいつて、私に世帯道具を買はしたり、衣服を拵えさしたりしようたつて、然うは行かねえ、阿魔のお世辭ぢやねえけれど、おつと其手はくひますまい。」と又煽る。

「情ない野郎だな、直にぶつかつて、染々姉さんからも口説かれりや、二十五まで縁遠い、總領の娘、しかも容色といひ、氣立といひ、親の口からは謂ひ悪いが五人の娘の中でも、飛離れた上出來、あまり出來過ぎて、氏神の山王様がお惜みなされて、其で片附かぬこととあきらめて居た



姉娘、出入の大工の長吉の處へ嫁きたいといひ出した、腕はよくツても評判のあの酒飲、あまりの事に之も矢張、氏神さまの思召ぢやと思つて合點をする。悪く揃うて又、山の手、下町、下總の在までかけて、三十七軒の一家一類、どれもく金を拵へることの上手な奴ばかり、こゝで一人つかひ失す者を授かることと往生する、隨分念を入れて此の縁を纏めてくれと、大旦那御夫婦に、目の前で謂はれてせえ、まさか手前にはと思つて、己も眞個にやせなんだが、長、疑はあるめえ、——恠ういふ次第だ。」

長吉黙つて聞いて居たが、

「ぢやあ何ですか、お梅さんも來たいといふし、大旦那もくれようといふんですか。」

大きく、

「然うよ。」

女房は長吉の顔を見詰めて控へた。

「だがね、兄哥、來る奴も、呉れる奴も。」

「奴とは何だ。」

女房傍より、

「まあさ、」

「來る奴も呉れる奴も誰にですえ。」

「何をいつてる、お前にだな。」

「此の長吉ン許へ來るんでせう。」

「然うよ、」

「箆笥、長火鉢、」

「何だ。」

「羽織、袴の許へ來るんぢやありますまい。」

「や、」

「土瓶、竈、」

「黙れ！」

「火箸、鐵火箸、せつかい、摺鉢、摺粉木。」

「黙れ、やい、黙れツてえに。」

「まあさく、お前、長さん、お前さんも何だね、そりや大旦那はお前を素裸と承知だけれど、其處はお梅さんが、女氣さ、些とはお前の心意氣も見たいやね、譬ひ火箸片端でも、私のために長さんが支度をして待つてくれたと思や、どんなに嬉しいか知れやしない、其處を含んで謂ふ

んだよ。これが風呂敷包を背負つて、片手に鐵漿壺をぶら提げて来るお腰の大きい女房を持つたつて、夜具ツ皮ぐらゐる洗濯をするが當前なもの。

それを何と、鼈甲の櫛笄ばかりでも二百兩たらずのお支度だつて謂ふぢやないか。それが、白無垢の襲衣で、いきな中將姫が脱出したやうに、お前さんの古疊の上へ、勿體ない、緋縮緬の長襦袢で、あの、すらりとしたかよい姿で顯れようといふのぢやないか。辛抱をおしつてば。」

「嫌です。喧嘩にや負ければツても、女の兒にや降参しねえ。私が許へ来てえのなら、路地の溝板に氣をつけて、勝手口の芥溜を跨いでよ、足の裏を汚しちや不可えから、いきなり流板の雑巾を取つて、板の間を拭きながら、六疊へ入つて来て、長さんお見棄なく、幾久くとお辭儀をするんだ。此方ア阿魔の達引にかつゑ切つて居る處だから、すぐに裸體に引剥かあ。」

「野郎！」

「長襦袢の上へ襷がけで、直ぐに井戸端へ出て米を磨げ。」

「黙れ！」

「其の氣なら跣足で駈込んだつて女房にしてやると、お梅さんにいつてくんねえ。」

「罰の當つた！ 此の野郎。」

と片膝立てた、險幕がたゞ事でないから、

「姉さん、兄哥にや詫てくんな。」といひすてに、ボンと門口を飛出した。ぴしやりと閉めて、つかつかと歩行いたが、片手に煙管、片手に煙草入を持つたまゝ、イんで、ちつとしばらく首垂れて、ほつと歎息をしてくるりと、引返さうとして、

「外聞が悪いやい、まゝよ。」といふとガツキリ煙管をさして、兩ツ提を三尺にぐいと、腰を捻つて駈出した。

「ありやりやんくくく。」

骨髓に入る寒月に、長吉は震へ聲。

鷺の灯

「旦那、旦那ッて雨戸の外で呼んだです。旦那は可いが三聲めには、書生さんの旦那と恚うです、  
剽軽な爺で年紀は五十六だと言ひました。」

御維新前能樂が盛な時分には其の爺驚流の狂言師だつたさうで一時火の消えたやうに成つたの  
が頃日大層な勢で流行出したから、諸流の月並の會の太郎冠者は勤りさうなもの、片田舎の湯宿  
なんぞに、夜番をして居なくつても可ささうなもんだが、いづれ其の昔も前座……いや、お待ち  
なさい。狂言師に前座は可訝い、あゝ、何とか言ひます。」

「アトだの小アトだのといふのがあるんですが。」と私は榊原が話しはじめた、齋念の湯の奇き物  
語、渠が容易に打明けなかつたのを聞く嬉しさに、そはくししながら、

「はあ、成程、して其の親仁は……」

「姓は何といふんだか、温泉宿の女中等は、甚吾爺さんくと言つて居ました。いかにも其の小  
アトぐらゐな處だつたのでせう。けれども此のお話では決して小アトでない。シテの方です。既

に其時の如きも、一所に不思議を試さうと言ふので、私を誘ひ出しに來たのですから。

尤も刻限に成つたら、聲を懸けて呉れ、出懸けたいと、日の中約束がしてあつたんですから、  
私も寝ないで待つて居ました。

逗留をした座敷は八番、下座敷で、尤も齋念の湯宿は平家造です。然も唯一軒。」

湯も岩から湧く温泉ではないと言ふ。四方青田の丘の、何某の屋敷跡一ヶ所、草の中に鼓子花  
に交つて黄なる防風の咲く砂地があつて、雪解の後、雨上り、不圖すると六月の早續き、村々水  
論がはじまらうと言ふ時分、清水がむくくくと草の根を白く洗ひ、眞砂を透過して颯々と流れる  
事などがあつたため、土地の人々、鎮守の神の御手洗と稱へて、靈水と呼んで、水の氣の無い時  
も、小さく竹垣を結つて、注連を繞らしたが、一歳秋のはじめ齋念寺の鐘樓が震れて、傾く途端  
に撞木が觸れて、巨鐘が自然に鳴つた、地震このかた、この清水噴出でて玉を聯ぬるが如く絶え  
ず、然も手に掬ぶと温く感ぜられたのである。

即ち町方の資産家、件の空地を所有した便宜に、分析して、萬病に利ありと言ふより、世のた  
め、人のため、村繁昌のため、こゝに浴場を起すに就いて、土地の者聊か異議なく、先づ板圍の  
假普請で、仕切のない、二十軒長屋のやうな、縦に長いのが一軒出來た。

當時も榊原は其の冷泉に遊んだことがある。小兒連れ夫婦の人にとまはれたが、妻女は五つ

に成る兒を負つたまゝ、俣も要せず、主人は瓢を腰にぶら／＼歩行きて、越前の國福井の市のはづれから、近い二里。田圃路を馬士づれに行く途中、掛茶屋の軒、石地藏の背後、土橋の袂などに五六ヶ所、齋念温泉と白抜に、黒旗が樹つて居て、凡ての光景、開帳の如く、客も在郷連が多數を占めて、然も未だ出來立の萬事整はず、瓢で酒を持參だから、夕飯も榊で何合と極めて炊かせ、三國港から賣りに來た、鯛を一尾、三枚におろして、潮と刺身と鹽焼と、指圖して料らせて、半日の清遊、部屋代ぐるみ總計二歩に満たざる勘定、其でも上様と言はれたのであつたが、此の二度目に榊原が行つた時は、既に茶代の請取が、活版で出來て居たと言ふのである。

二

「私の居ました部屋は、ずらりと二十八九枚、汽車が通るやうに並んだ雨戸の、通縁の middle に、餘り長い間だから兩端の他に別に戸袋が一ツ拵へてある、丁ど其の際で、譯なく、人に知らさないで開ける事が出来るのです。

是が幸ひと言ふのは、一體其の晩甚吾爺に誘はれて出掛けるのが、貴方の前ぢや些と大人氣ないですが、一所に不思議な事を見ようため、就いては、夜中になが／＼雨戸を開けなぞして、人に怪まれると、悪いからと、豫め甚吾が注意をしたので、それぢや本人、何うかといふと、いや、大臆病。夜巡りをする度に幾度驚かされて、わあ！と尻餅をつくか知れない。婦人小兒ぢやなし、聲を揚げて助船とも人殺とも、喚いて救を呼ばれない丈に、尙苦しいと、晝間、顔を合せた時、愚癡を並べたから起つた事ですが。

全體 私湯治に參つた時は、其の數の多い兩側の部屋に、客と言つたら精々二組、三組ぐらゐる。十日ばかり逗留をした間に、湯殿で出會したのは六十餘りの老人一人、其も無口な人物で、言を懸けることもしなかつた、恐しく寂れたもので、尤も長逗留に適した處ではない、三國港まで海は二里以上行かねばならず、御嶽が目の前に聳えて、木の芽峠中の河内が累り合つて居ますけれども、手拭を提げて上られる譯ぢやなし、眞個の旅籠の一軒建、村までも十町餘、それさへ、生魚一尾あるのぢやないでせう。通り過ぎると、直に福井の町です。

温泉の四方は残らず田圃です、退屈もするだらうぢやありませんか。

春秋の彼岸詣、御命講、十夜の次手などに町から日歸り、一夜泊の客は多いですが、夜分は盛時でさへ寂寞する、殊に私の居たのは五月雨の頃でせう。

随分風變りなればこそ我慢しましたが、いや實際大徒然、仰向けに成つて讀む書物にも飽いて、日の中、うと／＼所在なしに轉寢をするから、夜になると一時を打つても寢られないので始末が悪い。

灯は暗し、貴方、じと〜降續ける、宵から雨戸を閉めるでせう。一件の列車戸だ、凡そ小半時、がら〜がら〜がら〜と遣るですな、もう其の遠くから繰り込んで来る板の隙間の、宵闇の空を覗いて、あら、又夜が来ると、歎息をする次第。

(御退屈様。)と入つて来る女中でも話相手に成る事か、此の方至極御退屈の寢床を伸べて、匂々に引退ると、日一日、茶は飲み飽きる、手を敲いて湯沸の用はなく、發奮がないから酒は飲まず、呼び寄せて酌をさせるでもないから、四五人居る女中等、實に御客様を嘗めた話で、ばったんばツたんと夜延に機を織るんです。

遠くの方でね。

そら、寢床と同時に行燈を引替だ、四角くツて、圓くツてト判じ物のやうな灯でせう。乗つ、反つ居ない蚤まで突くやうな氣がして、腹這になつて、薄暗い廣間に一人、目を皿のやうにした工合は、前世の宿業かと思はれます。

其の中煙草の火は消える、老人の客は咳をする、雨は降る、箴の音は陰に籠る、鼠が騒ぐ、天井を睨め上げると、油皿が圓く薄ぼんやりと一杯に映つて、熟と見て居ると、燈心が二筋、やがて油がじり〜といふと、其の影が開いたり、すぼんだり、これが搖々して水が流れるやうに成ると、又うつる丁子が全然船の形。

三

「其は何うも、其處で何か出たですか。」

「否、これは唯徒然の餘りのお話をしただけで、其の燈心の二筋の影が、大きく分れて映る時、天井が口を開たやうな中から、鐵漿を點けた色の蒼い女の顔が出たなどいふのぢやありません。」

と榊原は笑ひながら、

「然し黒天井の燈心も、まんざら縁のない話ぢやないので。さあ、寢るには寢られず、起きてるのはつらし、退屈なり、自分で身體を持餘す、こゝで毎晩同一時刻に、一時毎十二時から始めて、カチ〜拍子木を打つて廻るのが甚吾爺。」

其の拍子木の音が、廊下盡の、宿の勝手口と納屋の間と思ふあたりで、チヨンカチ、と聞える、それから三歩ぐらゐるづゝ間を置いちや、カチ〜と打ちカチ〜と敲きながら、雨戸の外を次第に枕頭へ近づいて来るんです。

灯の鶯

やがて私の部屋の外で、一ツカチ〜と遣つて通り過ぎる、それから木の音が段々に遠ざかつて、此の廊下はづれへ行つたと思ふと、小さく呟えて、後の森へ響いて聞えなくなるのですが、毎晩でせう。

又是が一時置きに同一音で、大抵物置の邊からはじめて、森の處で行留りに聞えなくなるまで時間が極つて居りませう。寝られなくつて所在無さに困つて居る者の耳には、何れほど便りになつたか知れません。

拍子木のカチ／＼とカチ／＼の間々には寢床に匍匐になつて、行燈の灯を熟と頬杖で眺めながら、其の夜巡の歩行つきを考へて見たり、ざあ／＼雨の音の聞える時は、蓑笠で居るだらうと思つて見たり、時とすると、木を合圖に時鳥を聞きます。然ういふ時は夜巡が立停つたらうと思つたり、果して雨戸の外でも足を留めたやうな氣がするです。

三晩四晩と經つて、例時の刻限、同一時、聞えるなどと思ふと、遙にカチ／＼と言ふ音、さあ歩行出すわ、三步ばかり其處でカチリと打つと言ふ鹽梅ですから、何となく其を聞き／＼寝て居る私自分で夜巡りでもして居るやうな氣になります。然も其時分に成ると、箆の音は勿論、帳場などは謂ふまでもない、他に一組や二組ぐらゐる客はあつても、部屋が遠くに離れて居るから、いかに寂としても鼾の聲さへ聞えない始末。世の中には夜巡の爺と自分ばかりと考へるほど、急に烈しくざつと蓑を洗つて降る時は見て居る行燈の紙が濡れて私身體に、激がかゝるやうに思はれる、つい小歇になれば、額を拂つて吻と呼吸をつくといふやうな、毎晩夜巡を勤める心持で明け方になると疲れてう／＼寝入るのが殆ど連夜で。

其の夜巡をする内に、

(何か變つたことはないか、爺さん)つて、もしも夜巡をする内に爺が不思議なものでも見たと言へば、直ぐに其を、自分が見たぐらゐる考へで、熱心に尋ねました。丁ど前申す爺と二人で部屋を抜た、何です。然うやつて、雨戸を丁々とやる約束をした時です。

正午些と下つた頃、久しぶりで雨が上つたもんですから、いきれの立つ庭前を掃いて居たのを擱へて、まあ、爺といふので縁側へ腰を掛けさせて、茶なんぞ注いで遣ると、甚吾はかさね手に茶碗を乗せて、背後向きに其處ら、夜巡の節、一めぐりする路筋をずらりと胸しながら、

(いやもし、御退屈様で。)といふ。

(退屈は身勝手、言つて見りや榮耀の餅の皮とかいふんだが、爺さん、お前は嘸。毎晩人の寝る時分から大抵な役ではないな。)實際また大抵の役ではありますまい。」

四

灯の驚

「先づ老人に喜ばせを言つて、勅ると、額に皺を寄せて、ニヤ／＼して、下唇でびた／＼と茶のあと口を嘗めたです。  
(いえ、もし世間には權助と名乗りまして、寺の鐘を撞きますやうに、生れたものさへござりま

すぢや、私、甚吾と申して湯泉宿の夜巡を勤めまするに、屈託も難儀もござりませぬ。  
はや、二三年このかた馴れましたで、眠い目も極りがついて、宵の口とろりとやりますると、  
刻限に覺めまする、直ぐに拍子木を持つて納屋から罷出でまするが、雨も風も苦になりはいたし  
ませぬ。

一體が盜賊の用心、火の用心にまはりますでござりますが、扱て、夜巡が出ると極つて見れば、  
氣の利いた盜賊の方で用心して寄り着きませず、火の用心とても其の通り、豫て一人使ふほど、  
氣をつけまする主人なれば、過失もござりませぬが。

あの拍子木の音さへしますれば、此の親仁は居つても、居りませいでも澤山、申さば木を打つ  
機關親仁、蓑で出まする雨の夜などは、我ながら、全の案山子で脱殻になつた魂は、男部屋に木  
枕でござりますわ。

と暢氣なことを言つて、下腹に力を入れてウハ、と笑つたですがね。右の手で、茶碗を片寄せ  
ると、左の手を前へ支いて肩を落し、面のやうな扁い、愛嬌のある顔を、私の胸の處へ差寄せて  
低聲になりました。

(其の又拍子木が自然に空を飛んで、カチ／＼鳴つて歩いた日には、百鬼夜行の繪巻物の幕明  
といふ體で容易な事ではござりませぬ。

其に就いてお尋ねの變つた事があるでござりますよ。

是は、もう、旦那様の申しまする、御婦人方や何かにはお話の出来ることではござりませぬ。  
悚毛をふるうて、勿々當宿をお立退きにでもなりますと、寂れました折なり、主人どもに相濟  
みませぬ。

貴方様は然やうな憂慮もござりませぬで申しますが、其のかはり眞個にはなさりますまい。

つい一昨晚……)

何の此方から好んで聞いたくらゐです。眞個にするも爲ないもありません。ぐたりとした、身  
體を揺直して膝を進めました。

私も榊原の言に就いて、渠に我が膝を進めたのである。

「然も一昨晚と言つたですもの。得てかやうな事は、話す者の祖父さんが見たとか、伯父さんが  
聞いたとか、從兄弟の親類が其の朋友から聞いたとか言ふんだのに。」

「ぢやあ其の甚吾といふ夜巡の爺に現在、貴下がお聞きになつた、其の前々日の夜。」

「ですから私氣乗がしたです。」

燈の驚  
(爺さん、疑やしない、可いから、譬ひ虚言を言つても眞個にするから話して聞かせな。何か、  
此の鑛泉に主でも棲んで、夜中に其と出會つたともいふのか。)



(然やうなものではござりませぬ。嫌といふほど驚かされたのは一昨日の晩でござりますが、毎度、度膽を抜かれまするは其の晩に限つたのではないのでござりました。

例年此の五月雨になりますると、五月闇と、申上げるまでもござりませぬ、黑白も分かれぬ、其は其は暗いでござりまする。其處で敵めが羽を伸ばして酷い目に逢はせるでござりまするよ。

え、手前が好ぢやからと申して、直に其の警を持出しますも、をかしうござりまするなれども、入相など、水田の中に、徳利が立つた形に、すぼりと構へて居りまするな、怪體な奴でござります。

(泥籠か。)ツテ私は尋ねた。

甚吾爺が、

(青鷺でござりまして、)

五

「御覽じやる通、此の邊四方青田で、庄屋の森がござります。また森の前に大池がござりますに因つて、地體いかいこと居りまして、……」

逗留中は降籠められて、つい居廻へぶらぶら歩きに出掛けることさへしなかつたですが、其の

時爺がいふ大池は途中で見ました。鑛泉は丘のやうな處にあります。其の丘をだらりと下りて、立樹を四五本な。

松の高いのを潜ると其處に用水の溜がある。周囲は總體で七八町、北の片隅が深々とした森で、あとは其の樹立の名残が水で流したやうに淺く次第に疎になつて、其の四五本の松といふのも、矢張森の一部なんです、私が通つた時は、水が満々とあつて、實際よりは餘程渺として見えたですよ。

といふのが雨續きで溢れた所爲で、汀には恠るすらく伸びた葉ばかりの菖蒲、田の畔が二條三條、水浸りに沈んで、稲葉の伏倒れた上に乗つて、二人釣をして居たのがあります。殊に黄昏だつたから餘計に廣く見えたのでせう。

のみならず、福井の町を離れてから二里不足の間、唯蛭蜒した田圃路で、處々小橋があるばかり、目につくのは、湯の廣告の黒旗と、石地藏と、藁葺にした肥料の溜桶のうしろに、灸點の、これも旗が樹つて居る、それくらゐなものだつたので、池を見た時は宛然別天地へでも出たやうな氣がしたです。

鰻、鯰、などが澤山に釣れるのだと言つて、水浸りの畔にイんだのばかりではない、池の眞中に田舟を浮べて、一人頬冠をして釣つて居た奴がある。晩方だから其の形煙のやう、舟はじつと

して其まゝ沈んで行くやうに動かないで、却つて蓴菜の浮葉が、誘ひつれ、風に密と寄つたり、分れたり、寂しい事。

おまけに左手の汀は、寺でもあつた趾と見えて、苔の生えた石燈籠が、茫乎立つて、墓石がすらすらと、其處へも水が溢れて居た。空も池もどんよりして、唯見た處は、町も村も國も爰が行止りで、あとは筒抜けに海のやうな野原でもありさうな心細い景色が、大いに趣があつたですから、しばらく、腕車を留めて眺めましたつけ。

田舟の中の人の形が、舷へつかまつて、俯向けに水を覗いた。其の状、何の事はない其處から地獄でも覗くやうで、慄然として直ぐに腕車を急がせたです。爺のいふは其の池ですな。

(何が居る。)

(何とおつしやつて、其の青鷺でござりますて。……)

(驚か。)

何するものぞと、思ふと、爺は早く見て取つた、不平らしく、

(驚かと一口におつしやりますが、旦那様、彼奴、徳利の形で水に立ちますだけあつて、此の親仁には酒と一ツに、命取りでござります、恐しい。)

と舌を巻くです。唇を反してな。鱈ではあるまいし、凡そ世の中に、青鷺のために生命を取ら

れるといふがあるかツて聞いたです。

甚吾爺手拭を擱んで臂を張つた。

(其ぢやに因つて前にも申しました。え、庄屋殿の森から大池へかけましては、青鷺が巢でござりまして、何時大いこと居りますのが、又此の五月雨頃は旬でござりますわ。

や、いづれも名代な奴等、小溝端で蚯蚓を突いて、村の小兒に驚かされたり、川下で鮒を狙うて、船を見て遁げ出すやうな甘いのぢやござりませぬ。

福井の市へ伸して出て、人死のある棟の上でぎやツと鳴いたり、縁切の背戸でぐわツと喚いたり、三國港へ飛び歩いて帆柱を揺つたり、した、かなことを、はたかすでござります。)

甚吾は苦々しい澁面造りで。

六

灯の鷺

「(其の巢が總出で、糧を漁るでござりますに依つて、夜に成ると、大池の岸は首の押せくで、鷺だらけ、嘴を揃へたら何の事はござりませぬ。鳥の國の兵隊が行列をした體、いや夥しい事は、お百姓が肥料に取片附けまするので目立たぬのでござりますが、森の中は一夜の中に敵めが糞で、眞白に積るのが毎々でござります。何奴も、年功を経て居りますゆるゑ、日中は寂寥、羽音も

させず、潛んで居まして、夜に入つてから暗中を、ぎやつと言つては口から吐き出す呼吸を燃いて其の灯で、何と、鰻を鵜呑。

箕で計るやうな大池の魚は、波を立てて遁げるでござりまする。

中にもあぶれものが腹こなしに出て來まして、親仁が夜巡の路を二間置き三間置き、五ツ六ツ居る事やら、其とも一羽で幾度もするやら、眞の暗の足許から、ぱつと羽振をして起ちますわ。咽喉で呼吸を引いてはアとお前様、魂が天上をいたしますると、其ツ切、物音も聞えぬでござりまする。

此方は氣が上づりまして、いやはや、身體が宙へ上つたかと思ふと、踏出す足もぶらりと下りさうで、竦んで一步も動けぬでござりますよ。

(成程そりや吃驚だな。)

こりや、いかにも驚くでせう。で爺のいふには、(初手に啖ひました時は、嘘にも天狗に釣上げられたかと思つたでござりまする。)

氣味の悪い冷汗で、びつしよりになつて、漸々腰を据ゑた、引いた呼吸をウムと詰めましたなり、恐々歩行き出しますると、五間と出ぬに、又ぱつと飛びますわ。

此の術で晩方なぞは、お百姓が、畔で尻餅をつくことがござりまするを、豫て聞いて居りましたに因つて、思ひ出して、扱はおでやつた、庄屋の森の脚長殿ぢや。

然やうに心付きましたれば太う恐い事はなくなりましたもの、其時を初めに毎晩、其が又時節になりますと、毎年でござりまする。ちやんと心得て巡回りましても、不意を打たれてはぎよつとせぬ事はござりませぬ。

おのれ見ると、檜の木用心棒、六尺手ごろな奴を用意しまして、暗の中を透し、此方も夜巡、目は馴れて來ましたなり、一本脚を搔拂うて、胴中ひし折つて呉れうと、毎晩のやうに狙ひますが、如何な其の術をくひますか。

まざりと形を見せて、引寄せて置いて、棒が横なぐれに空を切るを合圖に、立ちざまに、耳を拂ふ、鼻を弾く、嚏は出ます。と鼻頭に皺を寄せて、くすぐつたいのを堪へる顔色、話に乗つて、縁側に胡坐を組んで握拳を膝について饒舌つたです。

灯の驚

(これが又毎晩で、馬鹿らしくはありまする、泣くにも泣かれませず腹が立ちまする、をかしさもをかしようござりまするわ、一時は夜討の體で、松明を持つて出たこともござりまするわ、如何様火があれば、敵殿いたづらはしませぬが、片手業で、此の拍子木を打ちまするに、便が悪うござりまするに就いて、又暗やみで歩行く、例物が遊びますぢや。

磨つた揉んだが今年になりまして、つい一昨晚、五日の夜でござりまする。

お節句に就きまして、帳場から一合下されたのでござりまする。三國鯉のぶつ／＼切で、嘗めますほどに、けるほどに、とろ／＼と肱枕、一天四海波を打治めたまへばと、一寝入りいたしましたて、酔覺のぱつと目が開きますると、お定まりの刻限。

お造酒がまはつて景氣はついたり、雨も止んで居りまする、不圖思ひ出して、恚ういふ時ぢや、狐でも来い狸でも来い、人間にかなふ事ぢやないぞ。

おのれやれ、見ろ、年來の意趣ばらしと、先づ身支度をいたしたでござりまする。勢づいて話したですな。」

## 七

「甚吾爺は然ういつて、手拭を扱いて疎めた項へ引掛けたです。

(ト拍子木を預けたでござりまする。多時打棄つて置いた用心棒、提灯を點けて参り、物置の隅から引出しまして、あとを閉めて鏡を下して、さて、提灯を吹消すと、勝手の知れた臺所の格子窓に引掛けたでござりまする。其處で一ツ身構をいたして、拍子木は首へかけたなり棒ぐるみ、咽喉を挟んでカチ／＼と遣りまして、いよく庭傳ひに繰出しましたわ。

これは此の邊のものでござると先づそろり／＼と参りながら、八方へ目を配つて、丁ど此のお座敷の前を通りまして、やがて七八間歩行きますと、そりや敵めの氣勢がいたしまするで、盲目打に一番やツと横に拂つたでござりまする。

此處で何です。私爺の言ふ事が一寸受取れなかつたです。何故と言ふと、先刻お話申した通りで、戸の外を、爺が廻る中は寝たまゝ、自分が、一所に夜巡をするやうな氣になつて、其の足の運び方さへ、左から右、右から左とまでに信じて居る前々日の夜中更に變りはなく、拍子木のはじめから聞えなくなるまで知つて居たですけれども、私部屋のさきで氣合を入れて棒を振廻したとは、聊も胸に響かなかつたぢやありませんか。

(爺さん、話はおもしろいがこしらへたな。)

(旦那。)

(嘘をつけ)と極めつけるやうにいつて、私思はず笑うたですな。

(こりや何うもなりません。こゝまでお聞きなされて、はや、疑はつしやりますやうでは、これから先、其の晩は親仁が勢に乗つて、何處までも追詰めて、せめて、長脛の爪尖なと挫いてくれうと、打ちはづし／＼、つい浮々と長追して、あの大池の岸まで参つて、どんづまりに水をはじいた棒で、女の裾を拂ひますると、手答へなく、煙を突いたやうな心持、呀、青鷺に女の裾がと、

吃驚して見上げますと、高い處に眞白な長い顔、目もなければ眉もないのが、荔枝のやうな口を開けて、おはぐろを見せまするで早腰を抜かして這ひました。

天窓の上で別の又しはがれた男の聲で、誰ぢや!と一聲かけられまして、何が泥龜のやうに脚を曳き摺つて、それから一目散に通げました事を、申上げました處で、根から眞個にはなされますまい。此處がものでござります。何と恠やうなことは、御逗留の、他のお客人に申される儀でござりませぬ。内の者にも話されませぬが、お見懸け申してお尋を幸ひ饒舌ります次第。

親仁も不思議でなりませぬ。青鷺の、脚を、脚をと狙ひました其の脚がつと女の裾になりまして。地體暗で、葦やら蘆やら、柳の葉やら、裾やら、袂やら見分けのつく譯はござりませぬに、小袖の襟を判然見まして、其れに合せるものを着たらしく、ふきの蒼いまで明いほどに認めました。其さへ解せぬでござります、落着いてから考へますと、例の青鷺の吐く呼吸の怪火の光に映つたかとも思はれるでござりますが、さて何も彼も顛倒いたしましたわ。

其とも、夜中に棒をばらして、青鷺を追かけます親仁が、現に此處に居ります上は、また何と間違つて、其の時分大池の邊を歩行く女中が無いにも限らぬでござります。兎もあれ、今一度、確に見届けたうござりますなれど、なか／＼以て、親仁一人には叶ひませぬ。

御退屈晴しぢや、欺されたと思召して、今夜おつき合ひ下さりませぬか、驚の儀は、親仁が一  
流の棒を使ひまして、池まで追ひ立てて参ります。何うでござります、且那樣。  
勿論の事! 其處で約束をしたのであります。」

八

語りつゝ、あつた榊原は言を更め、

「酷く大人氣ないやうぢやあるですが、其頃私、一人極の勇士でな、後に目が弱いために目的を變へたですが、未だ陸軍士官學校の試験を受けようと思つて勉強をして居た最中であつたですから、恐れんです。

否、恐れる恐れんより、のツけから、てんで事實にはしやあせんです、けれども此の剽輕な狂言師が誘ふのだから、よしんば嘘にしても何ぞ趣向があらうと考へたですから、早速承知をしたものの晝間見てさへ物凄いやうに感じた大池の岸を、眞夜中に誰が貴方、然も驚の脚が裾に化するなぞツてお話するもお恥しい。

灯の驚

ですが、……といひかけ、榊原は私の顔を見て又四邊を眊した。時恰も五月にして今宵然る雨簾々、旅店の一室に灯更けて、片明りに旅の伴侶の、榊原氏の片面暗く、疾しといへる目は却つて美しく輝いたのである。

私は卓子に腕をついて、其の黒き髻ある優しい面ざしの濃き眉の間に、或ものの潜めるをうかがひながら、對酌の杯を取り上げたが、酒が満ちて且つ冷くなつて居た。下に置くと、彼方は酌をしてくれようとして、銚子を持つたが、齊く無意識であるかの如く差置いた、此景此時、酒を交ふるに違あらず。

渠は直ちに言を繼いで、

「ですが事實であつたですよ。」

再び途絶えようとするから、

「謹聴いたして居ります。」

「甚吾は約束を違へずに來ました。尤も約束を違へた處で、其の時間には、拍子木が鳴るんですから、間違ひッこはありません。」

書生さんの旦那は、直に兩戸を開けたです。

(時間は可いのか)

(呀！ ようお待ちなされました、頼うだお方これを召されまし、ッて沓脱へ草履を直して呉れたです、草履を直して呉れたは可いが、書生さんの旦那が、今度は頼うだお方と變つたですな、)

「勿論、驚が女に變るんですもの、」

是を聞いて、

「大きにさ、」といつて榎原氏も私も齊しく笑つたが、怒る中にも室は陰々としたのである。

「又音のしないやうに兩戸を閉めて、庭に出ると、もう爺の形も見えぬ暗さ。」

(着たる鎧は黒革の、緘しに緘せる大鎧、草摺長に着なしつる、舊より好む大長刀、眞中取つて

打擔ぎ、……)

何が大長刀、爺は例の用心棒を搔込んで、今夜も一杯、微酔です、低聲で謡。

(ゆらりゆらりと出でたる有様、如何なる天魔鬼神なりとも、面を向く可きやうあらじと、我身ながら頼母しく、)

カチ／＼と拍子木を入れました。二歩ばかり前に立つたのが、密と引返して、

(叱！叱！)と耳へ口で。何も彼も唯察するばかり凡そ暗いたつて程のあつたものだらうと思ふですが、尤も兩戸を閉めてからは、黒白も分かぬといふのです、雨は降つて居なかつた、其の一寸先も知れない癖に、何か種々、動く、むら／＼としたものが、蔽被さつて、墨の流に藻の亂れるやうに、目前を襲つて來るので、足がすくみながら、手ばかり出しちやあ、十本の指をばらばらと開いて、恚う搔分け、搔分け行く心ですな。

だからひたりと身近に寄つた、甚吾爺も、何か眞黒なものが私に絡みついたかと思つたのです。  
(何だ)  
(何か、見えませぬか、旦那)といひます。」

九

「私は其の面上へ襲つて来る、動く闇を搔拂はうとして、水を浴びた時のやうに、平手で顔を撫でたです。」

而して瞳を定めたけれど、何を見ようといふ當もなし、闇中に色の薄い處さへないくらゐであつたですから、

(何も見えぬな、)

(敵、敵、敵めが、トやつてすぼんと控へて居られまするてや、)

爺肩を窄め、腰を屈めて、青鷲のイんだ姿をして見せたやうでありました。

夜巡は年來闇に馴れて、何分かものあいろが分ると見える。

(はあ、よく知れるな、居るか、些とも分らないが、)

(何もう、此方の冷汗で知れるでござります。長首を据ゑて嘴をむつと、動きませぬやうな目で

じろくくと睨めまする時は、其の六尺居まはりへ參つたものの、腋の下から汗が出まして、慄然としまするに因つて知れるでござります。

其處でおいでやつたと得物を振るでござりますが、もう敵がじつとして居りますなら、此の六尺棒の端は、盲目打にいたしても、何處へか打附りまする寸法でござりまする。

旦那様、今一羽飛上がらせて、其の證據をお目に懸けうぞ。)

どうくくと足踏して棒を突鳴しながら甚吾は叱!

(あれ、御覽じ、腹立やの、人間が間遠ぢやと心得て歩行き出しませぬわ、憎さも憎し、畜生、汝許さぬぞ。)

と居合腰に向顔巻で、つかくと出て、大薙に横に拂つた。

(曳!)

(は)と私思はず呼吸を吐いた、一道の風、空さまに暗を裂いて、寢衣の袖が揺れたです。

(遁げたな、)

(三間とは退きませぬが、おのれ、)

するくくと甚吾足をすらして出て、

(曳! や!)

(遁げた)

又空から倒にものが地に生えたやうな氣勢がするです。

(曳や！)

(は、遁げた)と手探りで、思はず呟く、自分ながら間の抜けさ加減といふのがないです。例の暗中を流るゝ、形のないむらゝは、頻にまつげにからまるから、泳ぐやうな手附、今思へばお話をするのも可笑い、極が悪いやうな氣がするですが、其の時は係合、狂人走ればで夢中だつたですよ。然も其處に現物が現れて働いて居るんですから。

甚吾が引摺られたやうに曳、や、を何と七八遍、打そらし、打ちそらしする中には道も一町足らず歩行き出した。あとから、進むともなしに、件の搔分けるやうな、泳ぐやうな手つきで、間の抜けた―は、遁げたか―遁げたかを繰返しながら、下ッ腹に力なく、浮足で、とぼゝと後について行つたですが、探りに出す手が、ざらりと立樹の皮を掴んだから、

(待て、待て)

(はいゝゝ)といつて甚吾は大呼吸を吐いて停りました。

(こりや何處だ)と聞いた時、何となく身のまはりに重い沈んだ風が吹いて、一面の水の臭、心地草履で踏んだ地もびちやゝと鳴るやうで、扱は最う大池かと思ふと違はず。

(やあ、こりや疊みかけて追ひこくる中に、何時の間やら参りましたわ、大池でござります。)

(今夜はよく女の裾にならなかつたな。)

(はい)といつて甚吾爺きよんとして氣拔がしたやう。

十

「其處で、目の前に大きな池一ツ控へたと思ふと、其の池は寒氣がするまで多時、來がけに腕車を留めて見た事があるですから、大略見當が着いたんですな。

突當りが森と、それから左の方が大廻りに齋念の湯へ通ふ路、自分が通つた處とすると、今居る前が、彼の時、二人の男の釣をして居た畔で、然うすると凭かゝつたこれは高くはないが繁つた松と、少しづつ、目星がついて來た。

然うすると、妙なもので、目の前にむらゝする黒いものがなくなつて、退くにも進むにも、足捌が出来るやうで、胸づもりで水の色も灰色に廣く渾沌として暗夜の底に動いて居るです。

(驚の行列は一向に繰出さぬな。)

(はい)とばかりで爺、二の句が續かぬですよ、何だか上づつて居るやうで。  
(何うした、最う其處等に敵ものの姿は見えないか)



(皆目闇になりました。)

(一つ横なぐりを遣つたら何うか)

(滅相な、お前様、今度拂ひますると、ソレ女の裾がぼつと明いのでござりますぢや。)

(得ものを貸せ。おい、其の棒を己に、)

(何うなされます、)

(杖にする。待て、今ぢや己の方が何うやら目が見えて来たやうだから、来た次手だ、もう些と水岸まで出て見よう。)

(まあ、お止しなされたが可うござりましょ、足の裏で、鱧を踏みますだけでも、好い心地ではござりませぬ。)

(構やしない、)ツて爺の手から棒を引取つて、一ツ足許を突いて見て、づか／＼と出ると、背後から扱帯の結目に兩手を縋つて、

(あ、待たしやりませ、それぢやで申さぬことではない、なあ。)

(うむ)と私も氣を入れて言つたです、凡そ朽木の光もない中に、向う岸の、此方側と同一森の末の、過般墓場の趾と見た石塔の水に浸つて居たあたりで、色の鈍い、濁つた、たとへば煤ぼつた瓦のやうな而して其の明の輪郭の亂れた焰が、ぼつと水面から一尺ぐらゐる上で、燃えたんです

もの、爺も私も確に見たです。

(彼か、)

(え、驚が炎でござります)といふ中に、前とは二三尺離れた、岸を此方へ寄つた處で、赤くなつた、はじめは握拳ほどの大きさに赤くなつて、密と指を開いた形で消えます。

と又燃えたですな。

赤黒い火の心には、蒼い光が包まれて居るかとも思はれる。

三度目に二ツ出た。

と直に三ツになつたが、急にふら／＼とぶら下るやうに五ツ燃えたです、其の時は、水も五所にちら／＼と池が見えて、眞蒼な汀の菖蒲が、濡色に黒味を帯びて照らされたですよ。

光物は丁ど葉尖に顯れる、顯れるは今の五ツが一時にフツと消えて、更に燃えるまでには一寸間があつたです。

爺は溜息。

灯の驚

並んで五ツ燃えた其の端の一ツは、最初水浸の卵塔ではじまつた時から場所を考へると、汀を輪に廻つて、然やう、はや一町ばかりも私も私どもの居る方へ近くなつて来たですから、

今度見える處はと、固唾を飲んでると、ずつと近いて一齊に七ツ點れた、菖蒲の葉すれにさら

さらりと燃え付きさうな勢だけれど、水茶屋の灯のやうに、ちらく／＼水には映りはせぬです。」

十一

「位置は矢張、菖蒲の上と向うを見ながら、私は我知らず手許の葉を握つて、便のない眞暗闇に、自分の身體とも思へない両方の腋の下へ、垂々と冷くかゝつたのは、濡れた葉末の雫ぢやなく、はじめ知つた氷のやうな冷汗で。

耳の附許のあたりから、針で刺されるやうに慄然としたです。

何うでせう、其の七ツ灯れた炎を見る目に、一所に脊の高い、女の姿が映つたぢやありませんか。唯影のやうな形とするには餘り明かで、又既に餘り其の距離が近いのであつたですな。爺がいつた裾はなるほど、明いほど、最う些と傍に来たら、縞がらも分らうと思はれる位、帯のあたりが暗くなつて、面長な俤かほのかに白い、心から蒼みがかつたと見て取るのは免れませんが。但爺が言つたやうに、眉も目もない——旅人が河内國千破矢の古蹟、金剛山の薬研越で、ともすれば見るといふ、十六七の氣高い姫、元祿風の振袖、さげ髪、兩袖を胸にあてて、深々と差俯向いて、百合の香のこぼる、ばかり、嬾と留南木の薫して、擦違ふのが、必ず山の頂の方から來て麓へ通るのを、一文字に突抜けて、面も觸らず上れば可し、一足でも踏停まつて、あとを振向くと、

彼方も屹と、立留まつて、下から仰いで振返る、顔には何もない、雪を唯面長に束ねたやうな、めんない上藤と、聞えた山媛、一目見るものはもんどり打つて、千丈の谷に落ちるツていひます。

と同一やうな、目も眉もないものであるか何うか、其は確とは未だ知れないのであつたですが、いや、最う瞳に刻まれて、目前を去らない、其の姿は然も次第に判然と、棲のする／＼と動くのも定かになつて近づくですな。

(白蓮童子六萬菩薩、靜まり給へ止動方角、白蓮童子六萬菩薩、靜まり給へ止動方角)と囁りついで地を動かすやうに、沈んだ力ある聲で口の裡で、太郎冠者は危急な場合、慌てて念佛も忘れ

たか、荒馬を留める呪文を唱へて全然夢中。  
容易でないのは、其の女が、胸さきを刃で抉られた、苦痛に堪へぬやうな、口を四角に歪めて、大變、鐵漿の黒々とした口を開けたと思ふと、炎の末の方から、すツと其の唇に吸はれたやうに消えて、池に向つた眞白な頬が、おくれ毛をかけたまゝ、明くなると、ツツと抜け出し、背後へ廻つて、瘦せた脊筋の邊ではツと燃える。

此の明で、も一人居るのが見えたです。凡そ水の底に幾年かを経たといふばかり、世にもしよんぼりとした鼠色の小袖に、青ざめた襟をかさねて、撫肩を細く、胸を片袖で緊乎と抱いて、

頤を襟につけて差俯向いた、白い片手を、他愛のないもののやうに出したのを、前へ立つたのが、うしろ手に取つて、導いて来るんですが、件の炎は、又、うしろの、小造な、女の口の邊で、すつと消える。暗の中へ、更に姿二つ黒く劃つて、色を、青く、一人は、鼠に、裾と袂を矇朧と描いたですよ。

口を歪める、炎が吸はれて、フツと赤くなつて直に暗い、再度此の鐵漿を見せられた時は、其の目鼻のあるなしに係らず、私膚が粟立つたです。

途端にな、足許で、ぶツ／＼といふ豪い泡が、鯨でせう？ 鰻でせう？ 鯨でせう？ 鯨でせう？ 炎が貴下、放れて一ツ池の中心へ燃えました。

女は二人とも立停まつた、もう此時さきが立降りませんかつたら、私は棒を棄てて遁げ出したに相違ないです、直、ものをいへば聞えさうな近間に來たぢやありませんか。」

十二

「何も彼も一所だから順が悪い、一度女の姿を見てからは、他事を言ふ違はなかつたですが、彼の青鷺の呼吸は、五ツ、三ツ、七ツつ、絶えず燃えては消え、消えては燃え、はじめは一ツ二ツ三ツと、恚う。」

いひかけて榊原は、火箸を抜いて圓の四分の一の線を描き、

「其の池なかに一ならび、いかさま爺の言が眞なら、青鷺が一行に並んで、交る／＼、炎を吐いては、菖蒲の根にくツついて、つながつて寝て居る魚を、漁るやうに見えましたが、數が増して、五ツになり七ツになつてからは、時とすると、巴形に入違ひ、上下に亂れて燃えたです。

絶えず其の明があつたために、する／＼と來る姿を續けて見たのに違ひないです。

而して、年増がゆがめる鐵漿の口を仕切つて、前で消え、後に燃え、其處で又消えると更に先達の女の棲の邊が燃ゆる工合であつたんですから、何の事はない、女二人は交る／＼、一ツつ、炎を吸つては一步來り、炎を吸つては二歩進むといふやうな次第、固より吸ふくらるだから吐くですな。

要するに其の女を、爺の説の如く青鷺の精だとすれば、それまでだけけれど、鬼か、人か、別にものがあるとするれば、鷺の佇んだ間を縫ひ／＼歩行いたのです。

さあ、今、間近になつて、立停まると、其時、一ツ遠く放れて、大池の水の凸なあたりで、根のない浮草が風に吹かれて漂つたやうに赤くなつたのを、前の年増は立つたツ切、背後に居た小造な方が、婀娜な胸を反して、裾を包んだ菖蒲の葉越、池の上へ半身を曲げて出すやうにして、炎を熟と見詰めた氣勢で、首を伸ばすと凄いほど美しい顔の正面が見えたです。

黒髪も高く結上げて、胸も膨かだと見て取る途端に、離れちや居るが、びたり、私と面が向合ふ状になつた。

一生懸命、おのれ嘴が長からうと瞳を据ゑると、何うでせう。目が眞赤になつた、爺の顛巻が浅葱に見えて、すくと細長い石の黒いものが頸を掠つて飛ぶから、はツとすると、細くあはれな聲が悲しげに長く水に響いて、然も慌しげに、

(あれえ！ 榊原……)

様と言つたか、やい、といつたか、馬鹿にして殿とでも申したか、唯自分の名を件の女の口から呼ばれたとひとしく、耳がグワンとして、水草が顔を撫でた。

私は倒れたでせう。

やがてむんすと、腕を握つたものがあるから、扱は爺が扶け起して呉れたのだらうと思つたです。

鬱した調子で、

(來さつせえ)と其まゝ引立てられた時は、全然別人であることを覺つたです。

而して何ういふわけか、自分を捕へた者は、過般腕車で通りがかりに此の大池を視めた時、背後向に田舟に乗つて、舷から眞俯向けに水を覗いた、煙に似た黄昏の形を、あゝして地獄を覗く

のだと思つて、厭な心持になつた其の男に他ならぬと、咄嗟に考へて最う失望したです。

「恚う語られた時は私も我ながら身の毛がよだつた、別に理由はないのである。

「恚ういふと、お笑ひなさいませうが、其の時は眞個。

それでありますから、其奴に引摺られるやうにして、暗がりの中を、びしよ／＼溢れた水に、爪さきを舐められながら連れて行かれる中は、池の上を渡るやうにも覺えて、夢心地にも、やがてあの田舟にのせられて、倒に卵塔場の底へ突落されると、其處に冥土があつて、先刻の女たちが棲んで居るのであらうと、憶測に違はず、驚の灯でない、灯が目を射たから、心付くと、廣い土間、高い天井、隅々には草が生えて、しつとりと冷い。屋根の上か、其とも地の中か、露が流れるか、雫が降るか、しと／＼しと／＼と水の湧く音がした。私は地の底へ入れられたと斷念めた、朽ちたが黒光のする玄關に、行燈を置いて、其の蔭に薄暗く、女が一人立つて居るから、勝手にしると、背を向けて、どつかり腰をかけたですが、背を襲うて冷い人膚が蔽れかゝるやうでした。

此の天窓から啖ふのかな、あの黒髪が項を捲くのが、呼吸の根の留る合圖であらうと、首低れて居ると、私を連れて來たのが、これも老寄で、ちよん鬘を結つた奴、盥を持つて來て、土間に据ゑて、私の足を頂くやうにして洗足をしてくれた。横へ來て式臺に手を支いて、

(何うぞ、此うおいで遊ばして)と立上りさまに行燈を宙に高く提げてすっきり圓髻の項白く立つたのは、見覚えのある脊の高い一件でせう。

ぬうと上つてから、私の裾を下したですな、拗ねたといふ身で、づん／＼、間を幾つか、中には大板敷などを通ることあつて、十疊ばかりの廣間へ入ると、天井の高い事。

此の天井の高いだけ、それだけ深く、自分は地の底に引入れられたのだと思つたです。床の間の正面に、白木の三寶、何にも載せてないが、飾つてあつて、右手に鹿角の、嚴い刀かけ、刀はなしに横に倒れて居た、左手の壁に凭せて、鐵小實、黒革緘の鎧一領、居丈高に飾つてある、此の背後の眞黒な壁から、若い女が、目のない顔を出すのだらうと、觀念しながら、豫め敷いてあつた蒲團の上へ、其へといふまゝ、に私は整然と坐つたですな。

次の室に裳の音して、襖越橘の香がすると、年増はずつと下つて、脆いて靜に開けた。中に白百合の姿が、鬱金の扱帯の色が目立つて、其のまゝ、崩折れて敷居の上に凋れ伏した。貴下、

と榊原は私を瞻り、

「爾時ほど美しい、私の許嫁を見たことは前後ないです、尤も其までに一二度より逢はんのではありましたが。」

「え、」

「ですが、渠は盲目なんです、風眼とかいふので、十六の時、兩眼とも明を失したんです、年増の女は私の知らない其の娘の乳母でした。」

あとは情事に關すればといつて、榊原は口をつぐんだが、前を察し後を尋ねて、略其の所以を解し得た。

榊原の許嫁は、盲になつてから、恥ぢて人に見えなかつた、また、年の若い學生も、めくらの女は厭はしくつて、見棄て果てる氣で、音訪もしなかつた、渠等は二人とも、福井の名家と豪家である。

女は世にながらへる效もなく、其ほどより親なる人が、別邸にするとして、買入れたまゝ、未だ修復をしなかつた、齋念の森の庄屋の邸あとに、乳母と二人で引籠つて、此處で常盤木の落葉とともに、長へに埋れ果ようとしたのであつた。

番人に雇うた親仁が、甚吾爺が榊原にした如く、雨の徒然に青鷺の怪火を語ると、物狂しい女は、あはれ、日の光にはものを見ずとも、然る世を放れたやうな、おどろ／＼の状は、いとせめて盲ひたる目にも見えようからと、乳母を促すので、辭みおほせず、泣く／＼手を取つて夜な夜な池の汀にイむうち、心の迷か、青鷺の炎、あれ／＼彼處にといふ内に榊原の姿を認めた。

あはれ盲めしひいくらか目めにも見みゆる君きみ、其その切せつなる心こころを察さつしてと、乳母うばに泣なかれ、女むすめに縫ぬられ、榊さかき

原はらは眼まなこを閉とづること半時はんときにして、其その妻つまたるを許ゆるしたのである。

七年ねんを過すぎたといふ、此この物語ものがたりを私わたしは銚子てうしの曉げうけい鷄い館わんで雨あめの夜よに聞きいた、齋さい念ねんの鑛くわう泉せんの家いの建方たてかた

が、能よく彼處かしこに似にて、然しかも小松原こまつはらの彼方かなたの新池しんいけといふさへ、花菖蒲はなあやめ其その趣おもむきに異ことならずとかや。

浪なみの音おと、松まつの風かぜ、雨あめの小留こやみに燈ともしび暗くらく、夜よはハヤ一時じに近ちかい。

「酒さけが冷つめたうなりましたが、お話はなしの餓うの音おとも聞きえませんが、女中ぢやうちうどもは皆みな寝ねたでせう。」

「丁ちやうど恚いかういふ晩ばんでした。」

兩戸あまどの外そとを夜巡回よまはりの拍子木ひやうしぎカチカチカチ。

榊原さかきはらは其時分そのじぶんはなかつたといふ、髻ひげを撫なでて莞爾くわんじとして、

「忘わすれました、甚じん吾爺ごぢいは、池いけから這上はひあがつて遁にげたといふです。」

## 留守見舞

拜啓、未だおん目にはかゝり申さず候へども、一寸御見舞申上げ候、皆々様御機嫌いかゞに候や。  
さて、私ことは、此のあひだ中、おんまへ様御主人はじめ、今度御出征に相成り候方々の、假  
のおん宿申上げ候ものに有之候。

御寄宿早々、葉書をとのお言、女中に買はせ差上げ候へば、直に四五枚お認めにて御投函お見  
受け申候ま、先づ一番に、お留守へお便りの事と存じ候處、後におなじみにあひなり、承り  
候へば、お國許にはおんまへ様はじめ、お小いのもお三人おいでのよしに候が、何、もう出發の  
際、すつかり暇乞をして来たから内には音信に及ばず、見送つて貰ひ、又あとくを世話になる  
有志の人にのみ、東京着を知らせしばかり、國を出る時や涙で出たが、といふわけですよ。など  
と笑ひながらお話しこれあり、然るにてもおんまへ様は申すに及ばず、お留守の方々には、嘸か  
し御出軍の後の、御様子、お聞き遊ばしたく在らせられ候はむと、察しまるらせ候ま、拙き筆  
にて申上げ候。

御主人には、何といふ控へ目に、内端に、おとなしく、優しきおん方に候や。私ども近邊の人  
たちも、我が軍人といへば、君に忠に、敵に強く、萬國に比類なき勇武のほどは承知いたし居り

候ひしが、愆くまでに國民に對して、温厚篤實なる紳士ならむとは。

おんまへ様御主人のみならず、お宿いたし候戰友の方々、いづれも荒き聲音もおさせなさ  
ず、猛きお聲も承らず、茶を一ツとおほせにさへ、お氣の毒、お世話ながら、とお申しにて、  
女中までも恐れ入り、其の御挨拶には及び申さず、御遠慮なく二階にて手をお鳴しなさるべく、  
或は號令をおかけ下されたきやう、申戯まじりに平に希ひ候次第に候。

此方に御逗留のお方ばかり、然やうには候はず、近所の民家いづれも同断、なほ本部より、命  
令を齎しておいでの方も、お人はかはり候ても、一々取次ぎに出で候家人に對し、兵士がお世話  
になります、人すくなの處を御厄介ですなど、慇懃なる御會釋に預り、何とも申上げやうこれな  
く、唯々猛きものゝふの厚き情のほど身に染み申し候。御逗留中夜分などは、嘸御徒然の事と存  
じ候へども、湯か然もなくば近間へ用達しにお出掛けにあひなり候のみ、早くお休のやうお見受  
け申し候が、寝返りの音、甕の聲さへ聞えず、いづれも枕許に銃、帶劍、彈丸、背囊、防寒衣、  
靴の新しきまで整然として、一氣に甲冑すべき御意氣込、寂寞たる中に殺氣を籠めて、一種神聖  
なる趣これあり、更くれば鼠も鎮りかへつて、其の威に恐れしやに存ぜられ、洵や、我が朝の勇  
士は寝ながらも霜の降りるを知ると申し候諺も、いつはりならずと覺え候。  
嚴肅かくの如くにしてなほ晝は日當りの縁側に襯衣にズボン下、或は旅装のまゝの大胡坐、お

んまへ様御主人の如きは片肌ぬぎにて

露西亞はよい國、大きな的よ、

打てばドン／＼皆中る。

と鼻唄まじりに、きゆツ／＼と銃身にみがきをかけて、膝をまじへ腕を組みつ、屹と照準を見て微笑まれ候。風情を、御わかれの折のおん心にては、いかに、お目にうかび候や。

其時は嘸ぞ萬里遠征の勇ましき御首途を、人目を忍ぶ御袖にも、包み餘る涙を以て、おん見送りの事とお察し申上げ候。況して承り候へば、御主人には、功名手柄の、後の榮はお話しくなく、偏に覺悟のみおあかしにあひなり、生きては還らじ、是を別、と御申し候よし、取れば憂し取らねばもの數ならずと歌にこそ聞き候へ、目のあたり生き別れてふもの遊ばし候おん心の中幾重にも推量仕り候。

さりながら古より潔く死を決したる人の、恙ありたるためしはござなく、世をも時をも思ひ切りたる、討死は格別身を捨てて勇氣凛々、いで立ち向ふ兵の前には、砲煙の雲おのづから散じ去りて、敵國の露の、もろき彈丸など御身のまはり六尺とは近寄るべくも候はず。

就ては、餘り女々しきやうに候へども、御舎營中、御主人より、お覺悟の趣き承り候。都度、いや、必ずしも戦死ばかりをおん心がけあるべからず、軍中決死の勢に乗じ、御身を輕々しく、

たまふな、どうせ命はなきものとて、河沼の悪き水など、なまにてはめしあがらぬやう、是非とも御揃ひ、無事に凱旋の日をお待ち申上げ候やう、くれ／＼も申し候事にて候。

さて、お國許御出立の折のお召ものの儀、御主人おほせには、このまゝ、當家に預りくれよ、袖觸れ合ふも他生の縁、五日なり七日なり折から深き御縁と存ず、命あつて、廣島、佐世保を海原より、あれ見よ、二階に障子あり欄干あり故郷、と甲板より港を望む事あらば、一文字に馳せ歸りて、其の時は屹とお尋ね申し、此の家にて百姓の端折りたる裾をおろし、我が陸軍の服に着かへたるを忘れぬし、再び此のどんつくを絡ひ、三尺をしめ、劍を解き手拭を腰にさげ、胸には勳章を飾りて歸國すべし。もし又旅順にせよ、浦鹽にせよ、はるびん、滿洲にせよ、さいべりあにせよ、敵軍撃退、露壘陷落、我軍勝利の戦報の序、ひらめく旭の御旗の影に、足をばウラルの山に向け、頭を、叡聖文武、尊きおん方おはします、東の方に並べたる死傷幾人ある中に、たとひ活字は少さくとも、我名を見出したまはんには、蕪畑の菜右衛門が、記念の布子と思はれる、媽々を泣かせに送る駄賃で、ちツくり二合半極めますべし、と呵々と笑はれ候、いかに文明五百年、外國にかゝる勇士の候や、よき殿お持遊ばし候。御事、お茶の給仕に參り候。親類の娘どもお羨く存じ候。

めしもの事申上げ候ついでなればお話し申候。出征の扮装一切、今日は、劍、明日は銃、



背囊よ、干飯よ、と順々に本部よりお受取りにあひなり候が、十五日の夜、傳令これあり、靴及び服を渡す、即刻本部に出頭あるべし、寸法合ぬものは、……隊に廻すよし、命令なりとて引返され候。

御主人はじめどかくと二階を下りて、なに、××隊へ編入だ、服くらるが合ぬとて、留守に廻されてたまるものか、寸法は丈でも、尺でも、足さへ入つたら合つたといへ、と口々に申され候、中には、さあ嫁入支度だといはるゝあり、引眉毛だと笑はるゝあり、年増だけに婿をきいて、胸がドキつくのとはわけが違ふ、よろしく申したよ、と傍からどやす人あり、哄と騒いでお立出で、やがて首尾よく一揃づ、引かへつゝ、いそぐ嬉しさうに御歸宅遊ばし候、承り候へば××隊へ編入されては、當分出征は無之由。

涙は婦人のじやうなれば、國許へは内證ながら、一度戰場へ出たが最後、其のおもしろい事、一生忘れらるゝものにあらず、のんきは節分の晩、へれけになつて年男を行るに似て樂みは遙に過ぎたり、まづく満洲の千疊敷に連發銃をばらくと撒いて、福は内、露西亞は外と思へば可し。そーかー等追儼をして進ずべし、但し鬼を追うたればとて、一家一國の面々、勤勉を事とし、節儉を旨として日夜出精せられずば、福は内とは參るまじ、と豚を肴に飲みながらの御物語。臺灣にて十五度の合戦にいつも先登の御功名然もこそと存じ思はず大杯を呷いで萬歳を祝し申

し候。

御出立の折から、あの重量の結束の上へ背囊を負ふはんとする年齢下方を介添して、御主人が、ドウ、其の方が躍りながら、ヒ、ヒ、といふ悪洒落の御元氣、ちらくくと雪も降り出し申し候が、決してくお案じなさるまじく、唯おんまへ様御病身にて入らせられ候よし、そののみ御案じ申上げ候。

おこども衆皆々様御機嫌よろしく候や、承れば一番末の坊ちゃんはまだ疮瘡前にて入らせられ候よし、お父上も軍隊衛生のため、當地にて種痘遊ばされ候。おむづかりなく母上のおん膝にて、一寸早く遊ばされ候へ。

右とりあへずお見舞まで、なほ時々おんたより申上ぐべく、偏に御自愛祈上げ候。かしこ。

東京府規格外許可用紙規第一〇九號

昭和十七年七月十七日 印刷  
昭和十七年七月二十二日 發行



著者

鏡花全集 第七卷  
會費 貳圓六拾錢

發行者

泉鏡太郎  
東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

印刷者

岩波茂雄  
東京市下谷區二長町一番地

印刷所

井上源之丞  
東京市下谷區二長町一番地  
凸版印刷株式會社  
(東京二二三)

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

發行所 岩波書店

電話九段(33) 一八七番(4)  
振替口座東京七四四一六番  
會員番號一〇二〇三七番

配給元 東京市神田區淡路町二丁目九番地 日本出版配給株式會社

(大森製本)

小店の出版物に就ては永久に責任を負うべく存す  
かちら丁の場台は直接店へ申下さい





